

無銘(R2) 1

フリーダムrepair

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔法科高校の劣等生とやはり俺の青春ラブコメはまちがっている。のコラボものです。

出尽くされた作品ではありませんが、是非コメントや感想を頂けると嬉しいですよ!!

・  
・  
・

魔法科高校に無事入学した比企谷八幡は、より一層エリート専業主夫の道を進む為に決意を固めている最中、中学時代からの腐れ縁にも近い知り合いの司波達也と講堂前で偶然にも出会ってしまう。

比企谷はその場を即立ち去ろうとするが……???

??この話では比企谷八幡と司波兄妹は中学時代からの付き合いで、知り合いです。

|      |      |      |      |      |      |      |      |    |
|------|------|------|------|------|------|------|------|----|
| 無銘 9 | 無銘 8 | 無銘 7 | 無銘 6 | 無銘 5 | 無銘 4 | 無銘 3 | 無銘 2 | 無銘 |
| 98   | 81   | 66   | 54   | 38   | 28   | 19   | 10   | 1  |

目次

## 無銘

### 魔法

その単語を聞くと俺の頭はズキズキ痛む。

頭というよりは心が痛い、若き頃の青苦い思い出というヤツだ。

魔法だけにとどまらず、マンガやアニメ、ゲーム、ラノベなどに出てくる不思議な力に憧れを抱き、自分にもそうしたものがあるのかのように振る舞う。

いや、もう本当思い出しただけで赤面モノ。

何故、そんなことをするのか。

カッコイイからだ。

まあ、中学2年生くらいなら誰もがそれに近い妄想を一度はしたことがあると思う。『カウントダウンTVをご覧の皆様、こんばんは。えーっと今回の新曲はズバリ愛をテーマに僕が詩を書いて、『みたい』なことを鏡の前で練習したこと、あるだろ？

しかも、人間、嫌なことほどよく覚えているもので、今でも夜中に思い出すたび、布団ひつかぶって「うわあああー!!」ってしたくなる。

### そんな魔法な単語『魔法』

実際そんな物は空想でそれこそ先程述べたようにアニメやマンガの中だけのモノで良かったのだが、現実が違う。

正確な年数までは覚えていないが、20世紀末頃から人類の滅亡だの、核兵器テロだのが頻発し、それを阻止するために『超能力』的なソレを使う警察官が現れたり、その能力を研究する機関が現れたり、『魔法』が非現実的なモノから現実的なモノへと切り替わってしまった。

その過程で東西の有力国家が『魔法』の研究を進めていき、ついに魔法は一般的な共有・普及可能な技術となった。

…まあ、要するに今までは特殊な人間にしか使えなかった超能力的なソレを一般ピーポーが使えるようにしたのだ…それが魔法。

勿論、勉強やスポーツ、芸術のように先天的な才能は必要だ。素養

ともいう。

だが、才能を必要としているのは何も魔法のみではないし、先程上げたように芸術やスポーツ、知性なんかも同じこと。

こうして超能力者は魔法によって技術体系化され、『超能力者』は『魔法技能師』<sup>まほうつかい</sup>となった。

核兵器すらねじ伏せる強力な魔法技能師は、国家にとって兵器であり、力そのものだ。

21世紀末を迎えても未だ統一される気配すら見せぬ世界の各国は、魔法技能師の育成を競いあっているらしい。

さて、では今度はその魔法技能師の育成機関の一例を挙げてみよう。

#### 国立魔法大学付属第一高校

毎年、国立魔法大学へ最も多くの卒業生を送り込んでいる高等魔法教育機関として知られている学校がある。

つまり、優秀な魔法師を最も多く排出しているエリート校ということでもあるのだ。

魔法教育に教育の均等などない。

非常にシビアな魔法界現在において、徹底した才能主義。残酷なまでの実力主義を貫いており、入学を許された時点でもはやエリート、その中でも優等生と劣等生に分けられている。

同じ新入生でも平等ではない。

例えば、魔法実技試験以外の全てにおいて天と地ほどの差がある相手だったとしても。

・  
・  
・

「…何でいるの?」

「?何でも何も今年からこの魔法科学校に通うからだか?」

第一高校の入学式の日、だが、まだ開会2時間半前の早朝。

新生活とそれらがもたらす未来予想図に胸を躍らせる新入生も、彼

ら以上に舞い上がっている父兄の姿も、ちらほら見受けられる。

その入学式の会場となる講堂付近のベンチに真新しい制服に身を包んだ2人組の男子生徒がいる。

片方は心底うんざりそうに、そっぽを向いていて、もう片方は何処かの自販機でも買ったのか缶コーヒーを片手に話していた。

同じ新入生、だがその制服には微妙に、しかし明確に異なる。

片方の男子生徒の胸には八枚の花弁をデザインした第一高校のエンブレム。

もう片方の男子のブレザーには、それが無かった。

「…いや、そんなことは知ってるんだけどな？そうじゃなくて、何故、こんなに早くにいるのかって聞いたつもりだったんだけど…」

片方の男子がうんざりとした、それでいてどろっと濁った目でもう片方の男子を睨みながらボソボソと口を開く。

しかし、もう片方の男子はそんな視線を飄々と流しケロッツとしていた。

「ん？何か言ったか？」

「…いや、だから何でお前が今ここに居るのかって…」

この距離で、この声のトーンで、聞こえていないはずがない。

飄々としたこの男、司波達也は、はあーつとでかくて長いため息を吐く。

そんなに嫌ならここに来なければいいのに、というかそんなロングブレス吐いていると、痩せ型の司波がさらに痩せちやう…などと心配していると、司波は手元にある缶コーヒーに口をつける。

「…別に大した理由はない、ただ深雪の答辞があるからな」

「…ああ、そういう」

こいつの言う深雪こと司波深雪はこの司波達也の実の妹で、千葉の兄弟がびっくりするほどのブラコン。俺もお兄ちゃん歴は長い方だと思っていたがこいつらは危ない。(主に関わったら自分が)

俺のあまり関わりたくないリストNo. 2に該当する人物だ。

勿論No. 1は隣でしれえ…と座っているこいつ。

何しろこの司波兄妹に関わるとロクなことがない、いや、本当にな

い。

「ここは逃げるが勝ち、三十六計なんとやらと言う奴である。」

「そうか、まあなら兄妹水入らずな所邪魔しちや悪いんでこれで…」

「まあまあ、学校施設を利用出来るIDは入学式後まで配られないし、来訪者の為のオーブンカフェも今日は営業していない。俺もどう時間を潰すか考えていたところだ、どうせ暇だろう、少し付き合え」

席を立とうとすると肩をガシツと掴まれてしまった…というか俺が暇なこと前提かよ。暇じゃなければどうしてくれるんだ!!暇だけど。

この兄妹に捕まらないためとはいえ、2時間半も早く家を出てしまったのが運のつきである。

とはいえ、ぼっち歴数十年の俺を舐めてもらっては困る。

俺クラスともなると携帯一つあれば時間なんて余裕で潰せるし、なんなら徒手空拳でも時間を浪費出来る。

中学時代よく授業中とか指遊びでカエルとかやって1人口パクでけーろけーろとかやってたし、こんなこと絶対人には言えないけど。

「いや…別に時間潰しには困ってねえし…」

そんなことを考えながらやんわり断ろうとすると、講堂の中から在校生らしき人がこちらに声をかけてきた。

『おーい、そのキミ一科の学生かい?もしよければ入学式の会場準備手伝ってくれないか?』

辺りを見渡すとぼつぼつと、校舎から出てきて、中庭を横切る左胸にエンブレムがある在校生達が。

式の運営にでも駆り出されているのだろうか。

その中の1人に呼ばれていた。

「ふむ…ならば仕方ない、俺は読書でもして式の開始まで時間を潰しているから、お前は行ってこい」

「…あん?お前が行けよ、時間潰しに困ってたんだろ?」

コイツ…俺を生贄に自分が楽する気だな、許せない!!俺がする!!すると司波は自身の胸をトントンと2回程叩く。

「呼ばれたの一科生だ、俺には関係ない」

それだけ言うと自分の持っている端末を開き、書籍サイトにアクセスを始めた。

この野郎：軽く論破の1つでもしてやろうかと思ったが、グツと堪え、小さくため息をついて講堂の方へ足を向ける。

確かに司波の言う通り呼ばれたのは一科生で、この場合の一科生は俺だろう。

二科生たる司波は関係がない。

この一科生と二科生という分け方にも悪意を感じるが、呼び方には悪意しかない。

緑色のブレザーの左胸に八枚の花弁を持つ生徒、つまり一科生は『ブルーム』と呼ばれ、持たない二科生は雑草、『ウイード』と呼ばれる。

この学校の定員は一学年200名。

その内100名が一科、もう半分が二科の生徒で入学する。

国立魔法大学の付属教育機関たる第一高校も、魔法技能師の為の国策機関だ。

国から予算を与えられる代わりに、一定の成果を義務づけられている。

まあ、簡単な話ノルマがあるのだ。

その分減りつつとは言え事故も起こるし、しわ寄せも二科生に行く。

知識や経験のノウハウの蓄積によって、死亡事故や身体に障害が残るような事故はほとんど根絶されたいが、心理的要因で使えなくなってしまう生徒もいるらしい。

その穴埋めが『二科生』という認識で、彼らは学校に在籍し、授業に参加し、施設・資料の使用をすることができるが、主な魔法実技の個別指導を受ける権利が無い。

独力で学び、自力で結果を出す。

それが出来なければ、普通科高校卒業資格しか得られない。

魔法科高校の卒業資格は与えられず、魔法科大学には進学出来ない



というハンデを与えられている、らしい。

そこを皮肉られると此方としても反論しづらい。

まあ、それを分かって言ったのだらうが…

・  
・  
・

…人は何故働くのか。

そう問われたなら、多くの人はこう答えるだろう。

金、やりがい、自由だと。

完璧な答え、エクセレント、最高、素晴らしい、ブラボー、ハラシヨ。

全くもってその通り。この世界においてそれ以上の回答はそうあるまい。

では、今度は違う質問をしよう。

…人は何故働くのか。

すると、殆どの者は少し首を捻りながら、あるいは質問を再度聞き直して、結果、また同じ答えを出すはずだ。

グット。プレサイスリー。グレイトですよこいつは。最高にクールで優れた模範的な回答と言える。真面目な人間、お兄さんは好きだなあ…。であればこそ、最後にもう一度。

今度は別のクエスチョンを投げかけてみるとする。

…人は何故働くのか。

聞かれて、また同じ答えを口にする者は、どれくらいいるだろうか。三度繰り返し返されたその問いに、寸分変わらず回答出来る者がどれほど存在するだろう。馬鹿馬鹿しいと怒り出すものはや何か意図があるのではと勘繰る者、呆れて無視する者だっているだろう。仮に、先ほどの答えを口にしたとして、全く同じトーン、同じ意図で言える者は少ないのではないか。

『…人は何故働くのか』と、一言一句変わらない言葉であっても、何度

も繰り返されれば、それを受け取る者は勝手に解釈を始める。

どれだけ機械的に無機質的に言ったとしても、その文字面の意味はそのままではいられない。

三度四度と繰り返せば、その言葉の意味は変質していく。だから、きつと問われた者は考えた末に違う答えを出すだろう。

学生時代、あるいは在学中のテストの時などで経験は無いだろうか？記号を塗りつぶしていく時に同じ記号が連続して塗られていくと不安になったりしない？しないか。

要するに、自分だけの解釈を口にし、どれだけその質問について語ったところで、いづれも正解であり、正しいのだ。

けれど、誰も根本には気がついていない。

『…人は何故働くのか』

そんな質問に俺なら違う答えを出す。

それは…仕事を押し付けてくる奴がいるからだ。

そう、仮に定時で自身が片付けるべき全ての仕事を終えてもサービス残業という新たな仕事湧いてくる、勿論それを押し付けてくる存在がいることによって本来自分の範囲を大幅に上回る量の仕事が増えること増えること…。

…本当、何で人は働いているんでしょうねえ…

『その一年!!この機材向この教室に運んでおいて!!』

あれから馬車馬のようにこき使われていた俺の腕にさらに重そうな機材が加わる。

壁に掛けてある時計をみると入学式開始まで後30分と言ったところだろうか。

そこでようやく現実逃避気味になっていた思考が現実に戻される。

ふええ…ここ働かせすぎたよお…初日からこんな働かせるとか、どこぞのゲームクリエイト会社もビックリだよ。…流石にぞいぞい出  
来ない。

「ふふ、八幡、頑張っているわね」

機材の運搬を終え、ようやく一仕事終わったかと教室を出たところ

で声をかけられた。

まず目に付いたのは制服のスカート。それに加えて流れるような黒髪がさらつと空を舞う。

そしてその人間離れた美貌が嫌という程存在感を放っている。

「…うへえ」

ちよつと嫌そうな声が出てしまった。しかし、それも致し方あるまい。相手が相手である。

そんな俺の心情など露程も伝わらなかつたのか  
その人物は此方にやって来た。

「さっきから見えていたけど、あなたがこういう行事の準備を手伝っているなんて、驚いたわ」

「…見てたのかよ」

なんなの、俺のファンなのかよ…。俺を見ている暇があるなら答辞の練習でもしてろよ…

「…ま、成り行きだな」

「まあ、それはそうでしょうね、貴方が積極的に入学式の準備の手伝いなんて想像もつかないもの」

クスクスと目の前の少女が軽く笑みを浮かべる。

その光景はとても絵になっており、周りの時間が止まってしまったかのように、ある種神々しさが出ているようだった。

「それで？何か用か、司波妹」

「いえ？別段用があつたワケでは無いのだけれど、八幡が働いているなんて珍しいモノを見たからつい…」

おい、その本気で意外そうなモノを見る目やめろ。すっごい恥ずかしいから、今までの人生改めてまっとうに生きようとか改心しちやいそうになるから。

そんな事を考えていると時刻は既に開会10分前、そろそろ持ち場についた方がいい頃合いになっていた。

「それじゃあ、俺こっちだから…まあ、その何？答辞なんだから、そろそろおまえも行った方がいいんじゃないやねえの？」

「本当、もうこんな時間…それじゃあ八幡、また後で」

俺の言葉に同意したのか、司波妹は軽く会釈すると反対の方向へ向かって歩いて行く。

後で…か、出来ればあんまり関わりたくないんだけど、そうもいかないんだよなあ…。

小さく出た溜息にそんな感情を乗せ、俺もゆつくりと会場の方向に足を向けた。

## 無銘2

先輩方の熱い可愛がり（相撲部屋のな意味で）の所為で、俺が講堂に入った時には、既に3分の2以上の席が埋まっていた。

演台が底になっているすり鉢状の構造ではなく、演台を見上げる座席配置は、この講堂が講義用のもではなく式典用であることを示している。

きっとこの権威主義は国策学校ならではのなんだろうな。

なんて割りかしどうでもいいことを考えながら、何処に座ろうかと空席を見回す。

座席の指定は無いから、最前列に座ろうが最後尾に座ろうがそれは自由らしい。

今でも学校によっては入学前にクラス分けをして、クラス別に並ばせる古風なところもあるが、この学校はIDカード交付時にクラスがわかる仕組みになっている。

従って、クラス別に自然に分かれる、ということはない。

だが、新生生の分布には明らかに規則性があった。

前半分が1科生、後ろが2科生。

そんな差別意識は割りかし本気でどうでもよいのだが、俺の経験則から言って、基本的に後ろの席は貴賓席なのだ。

つまり、ウエーイと騒がしい連中やその学校の最大派閥が陣取ると相場は決まっている。

そこに混じることは大変苦痛を伴うので、1番前や真ん中辺りが俺の指定席となる。

前の席でも右端左端は死角になりやすいので、ぼっちが狙うべきはその辺りだ。

座席と座席の間をくぐり中央に近い空き席に目をつけ、そこを目指して既に座っている生徒を掻き分けながら進む。

途中、悪逆非道にも俺を売り、自身は優雅に読書タイムを決め込んでくれた男子生徒と目が合うも、向こうは同じく新入生な女子2人と

会話していることもあり不用意に絡まれることも無く、どちらとも無しに視線を逸らした。

：本当にいいご身分だなアイツ、今度妹の方にチクってやろう。

そんな些細な誓いを胸に席に座り、新入生代表として呼ばれた司波妹の答辞を聞くことにした。

・  
・  
・  
司波妹の答辞を聞くことしばし。

途中、意識がうとうと飛びそうになりながら聞いていると、いつの間にかやらし式自体が終わっていた。

：別に寝ていたとかそういうワケではない。

うん、本当、ハチマン、ウソ、ツカナイ!!?

実際、司波妹の演説は見事なものだったと思う。

まあ、この程度のことであの司波妹がへマをする姿なんて想像もつかないけど。

『皆等しく』とか『一丸となって』とか『魔法以外にも』とか『総合的に』とか、結構際どいフレーズが多々盛り込まれてはいたものの、それらを上手く建前でくるみ、摩擦を感じさせない辺りはさすがとしか言いようがない。

その態度は堂々としていながら初々しいしく慎ましく、本人の並外れた美貌も合間って、新入生・上級生・果ては女子生徒までもがハートを鷲掴みされたかのように虜になっていた。

俺の隣にいた女子生徒なんて司波妹を見て気絶するレベル。

：司波妹の演説のせいだよな？ 決して隣が俺だったからキモすぎて寝ていたとか、そんな席替えした時の隣の女子みたいな反応じゃないよね??

：あれって俺全然悪くないのに、なんで俺が悪いみたいな空気になるんだらうな。くじ引きなんだから俺の席の横を引いちやったくじ運の悪さを嘆けっつーの。

そんな俺とは対照的に、明日からの司波妹の近辺はさぞ騒がしくな

るだろう。

全然羨ましくはない。

そもそも元来、クールでハードボイルドな俺は暑さにはめっっぽう弱い。

なので少しでも涼しい方がいいのだ。

人間の基礎体温は大体36度程度。気温にすれば真夏日どころか猛暑日である。

さしもの俺もそんな高温多湿に耐えられるはずがない。

猫なんかもそうだろう。

暑いのと人気が無いところへ行くものだ。俺も純然たる暑さ対策のために人気の無いところを目指した。いや、別に既に仲が出来上がりがつつあるHRに顔を出すのが面倒くさいとかでは決して無い。

これは本能的行動であって、むしろ、そうしない連中のほうが生物としてまちがっている。

大体、このHRと言う制度自体、古い伝統を守り続けている一部の学校を除いて、担任教師がHRを仕切るなんていう制度は無くなっているのだ。

事務連絡に一人一人を使う必要はなくて、そもそもそんな人件費の無駄遣いをする余裕のあるところも少なくなき、全て学内ネットに接続した端末配信で済まされる。

学校用端末が1人1台制になったのは何十年も前のことだ。

個別指導も、実技の指導でなければ、余程のことで無い限り、情報端末が使用される。

それ以上のケアが必要なら、専門の資格を持つ複数多分野のカウンセラーが学校には必ず配属されているのもあって、何も無理に集まる必要はない。

では何故HRがあるのかというと、実技や実験の授業の都合だ。

それに自分用の決まった端末があった方が、何かと利便性が高いという理由もある。

背景はどうあれ1つの部屋で過ごす時間が長ければ長いほど、自然と交流も深まるという考えだろう。

何はともあれ、人間関係を望むならHRに行くのが1番の近道と考えられるのだが、俺は別にそこまでして行こうとは思わない。

式の終了に続いて、今度はIDカードの交付があるので交付窓口に並ぶ。

予め各人別のカードが作成されている訳ではなく。

個人認証を行って、その場で学内用データを書き込む仕組みだから、どの窓口に行っても手続き可能なのだがここでもやはり、自然と1科と2科の壁が生まれてしまっていた。

IDカードを受け取るとそこには自分の名前とクラスが記名されている。

『1年A組 比企谷八幡』

ふむ、クラスを確認し終わると基本的にそこから先は自由行動になる。

帰ってもよし、校内を見学してもよし、それこそ先程の述べたようにHRに参加してもよし、と、ちなみに勿論のことながら俺は帰る。

ただ帰るだけではつまらないのでラーメンでも食って帰るか…。

今日はあつさり系の気分なので『蓬莱軒』辺りがいいかもしれない。

新潟ラーメンの店なのだが、あつさりスツキリとした透き通るスープは極上だ。ああ、いかん、口の中に涎が。

と、そんなときだ。後ろから声を掛けられた。

「あ、あの!!」

「あん?」

俺は至高のラーメンタイムを邪魔されて、ほぼ不機嫌モードで振り返る。

これが司波兄妹なら完全スルーを決め込むパターンである。

振り返って見ると、そこには同じく新入生と思われる女子生徒が2人。

髪型は、耳が隠れないよう左右に分けていて、首の位置からヘアゴ



ムで2つにした長髪、そしてそれらが歩くたびに揺れている。

探るようにして動く視線は落ち着かず、俺と目が合うと、ひっと小さく悲鳴を上げた。

…俺はクリーチャーかよ。

一定の間が開き、何をどう切り出そうか考えていると、話しかけてきた女子生徒の友人らしき人物から助け舟が出された。

「ほらほのか、自己紹介するんでしょ…まったく。すみません、この娘ちよつとおつちよちよちよいなもので」

「ひどい雫！ちよつと焦つちやつただけじゃない！」

なんて漫才地味たものが始まってしまった。

えつと、一体何？クレームかなにか？いやでも覚え無いしな…というかその前にこいつ誰？

正直言つてまるで覚えがない。

というのも、彼女ははじめに話しかけて来た方は、まさに今時の女子高生って感じでこの手の女子はよく見かけるものの、まったく俺とは交流が無い。なんならどの手の女子とも交流はない。

でも、向こうから話しかけてきたしたな…その友達との間に割つて『すみません、どちら様ですか？』とは聞けない雰囲気だった。

と、そこで胸元にエンブレムがあることに気がつく。

この学校は1科生と2科生のそれぞれをエンブレムの有無で分けているのだから必然的に彼女らは1科の生徒ということになる。

…別にエンブレムに真っ先に気がついたのは胸を見ていた訳じゃなくて、偶然目に入ったただだからね？ちなみに片方の女子はけつこうでかい。

「あ…えつと、とりあえずどちら様かお伺いしても？」

雰囲気気を気にしていても話は進まないの、まずは相手の自己紹介を促すことにした。

やたら紳士的なのはやましい気持ちや誤魔化す為なんかじゃなく、勿論俺の純粋な優しさであることは強調しておきたい。

もうね、俺つてば超紳士。その証拠によく紳士服着てるし。

「私は北山雫。こっちは友達的光井ほのか、同じ一年生でA組。えつ

と君は…」

彼女、北山さんたらいう女子に促されて、はあとかわけわからん会釈をする。

多分このまま自己紹介タイムに入る流れなんだろう。

「1年A組 比企谷八幡です。えつと、それで何か？」

「お、比企谷君もA組なんだ。じゃあ同じクラス同士。これからよろしく」

「あ、ああ…」

なーんだ、ただの社交辞令的なソレか、しかしまあただの社交辞令的な挨拶とは言え挨拶は大事だからな。

RE：挨拶から始まる魔法科生活とか始まっちゃうんじゃないの？

ちなみに死んでも過去には戻れない（主にやらかした時間や出来事的に）

さらに言えば俺は死に戻るタイプの異世界モノより女神を連れて異世界生活を送るタイプの方が好み。

話が逸れた。

まあ、とはいえ挨拶程度は小学生でもちゃんとするしな。

むしろ不審者には積極的に挨拶していけと小学校で教えてるまである。

そう考えると向こうから挨拶されたのは不審者に対する先制攻撃だった説が浮上してきちゃった。

あれだな、何見てんだよおめえ、どこ中だよ！的なことかな。

そんな割とどうでもいいことを考え、適当に社交辞令的な話をする  
こと十数分。そろそろHRに出る生徒は教室に向かった方がいい時間。  
間。

「ところで比企谷くんはこの後どうするの？私と雫はこれからHR出るけど」

「あー、俺は帰るわ…それじゃあ…」

ようやく世間話を終えて校門を出ようとすると、そこにはもうすぐHRの時間だというのに人だかりが…まあ、なんとなく予想はつくの

だが。

「え？何々？?どうしたの？」

人混みから中を覗こうと、俺におぶさるように肩から背中にかけて光井の腕が添えられた。

ゾワリと悪寒が走る。突然触られてびっくりしてしまった。

控えめにつけられた香水の香りが動きに合わせてふわっと漂う。

ボディタッチとか、これってファールでしょ…。

かといって、振り払ったり躲したりできるほど俺も冷静ではなく、そのままの姿勢で固まらざるを得ない。

「……」

光井は人だかりの先にある光景を目にしているのか、しばらく黙ったままだった。小さなため息だけが耳に届く。

「あー、司波さんだね、ほのか司波さんのすごいファンだから…」

…やっぱりあの人だかりの中は司波妹か、というかファンで。

「試験会場で一緒だったみたいで、そこで一目惚れしちゃったらしいよ」

「あ、そう…」

そんな俺の心情を読んだのか北山が解説してくれる。

すげえ。多分今までで一番いらぬ情報を手に入れてしまった。

司波妹の洗脳歴とか使う機会が何1つとして思いつかない。

が、しかし、まあ分からんでもない。

確かに司波妹は男女問わず人気はあるし、なんならファンクラブの1つや2つ平気であるだろう。

「ああ!!…やっぱり司波さん綺麗だなあ…あ!」

ひとしきり見て満足したのか、今の状態を振り返って自然とはずかしくなったのか、光井はようやく俺の背中から離れる。

「あ、あ、あの、すみません!!」

「…あ、ああ」

落ち着き払って答えたものの、正直心臓は未だに全力疾走したみたいになっている。なんでこいつはこういう行動を取るんだっつーの。

いいですか？そういう無邪気な行動がですね、多くの男子を勘違いさせて、結果、死地へと送り込むことになるんですよ？わかったら、今後、『ボディタッチをしない』『休み時間や放課後、男子の席に座らない』『忘れ物をして男子から借りない』、以上のことに気をつけて行動してくださいね。

と赤くなっただけのような頬を誤魔化すためにも説教をしておこうと光井に顔を向ける。

「あのな…」

「あれ、お兄さんだって」

「え!?どれどれ?!?!」

すると北山がさらに人垣の中の奥に司波兄を見つけたのか口を開く。

言うか早いか光井はぱつと反転し、ぱたぱたと早い足取りで北山に近づいていった。

逃げられたか…まあ、いいや。

しかし司波兄までそこにいるとなると、校門から出るのは少し時間を置いた方がいいかな…鉢合わせたら嫌だし。

「思っていたより普通だな、顔はまあまあだけど」

なんて北山から司波兄への酷評を聞きつつ、校門から遠ざかろうとすると、周囲も司波兄の存在に気がついたのかざわざわとぎわめき立つ。

『補欠』『スピア』『ウィード』『花無し』『主席の妹に劣等生の兄』『シスコン悪魔』『スクソ兄』などなど色々な単語が風に乗って流れてくる。勿論最後のは俺。

そんな中で1人固まっている人物がいた。

「あの人だ…」

「え？」

固まっていた人物こと光井ほのかは司波兄をじっと見つめながら続ける。

「…入試のとき、すごく無駄のない綺麗な魔法を使う人がいて、さすが魔法科高校だなんて思ったのよ…」

「それが、なんで…なんで二科生ウイードなのよ…っ!!」

ズビシツと音がしそうな程力強く指された指は勿論司波兄に向けられている。

まあ、確かに司波妹と同じ会場で受験をしたのなら司波兄の魔法を見ていてもおかしくはない。

そんな中で司波兄だけが二科生判定を喰らっていることに疑問があるのも分かる。

だがな…その前に光井、今のお前周りから見たらただの変な人だぞ？ほら、周囲の何人かはこちらをチラチラ見ているし。おい、光井さん？

それでもよほどショックだったのか、光井は固まったまま動かない。

…やだ、なにこの子、不審者。今度からは俺も挨拶して牽制しよう。

挨拶ってほんと大事だな。

挨拶で、しっかり築こう、監視社会（今週の標語）

挨拶されて好意をよせられているのかと勘違いするどころか、挨拶されることに恐怖しなければならなくなる、こんな世の中じゃ。ポイズン。

そんなどうしようもなく下らないことをかんがえながら、俺はそつとその場を後にした。

### 無銘3

めざましの代わりに、スマホのアラームが鳴る。

グットモーニングTOKYO。

今現在、俺は魔法科高校に入学するため、愛しの我が郷土の千葉を離れTOKYOこと東京で一人暮らしをしている。

最初は自宅から高校までの道を考えていた、何しろ千葉から東京までは近い。

むしろ東京に1番近い県だと言ってもいい。

つまり首都に最も近い県であり、転じてニアリーイコール首都ということでもうほとんど首都なのではないだろうか。すごい。ちばすごい。

東京駅までは総武線快速でつるつと一本でいける。

あるいは、京葉線という手もあるだろう。はやい。ちばはやい。

だが東京駅における総武線快速ホームと京葉線ホームの冷遇っぷりはやばく、総武線快速はなにこれ石油でも掘りに行くの？つてくらい地下に潜るし、京葉線にいたっては、これはもう東京駅って呼んじやいけないでしょ…つてくらい離れた位置にある。とおい。ちばとおい。

なんなら長距離輸送線…以前なら新幹線と呼ばれたモノに乗るときは品川のほうが遠いけど便利まである。

千葉からこんなに遠いとかどんだけ田舎なんだよ東京…

とはいえ、そんな長い俺史（16年前後）において、約束された楽園と謳われた（俺に）千葉であるが、やはり通学という面ではより学校に近い方がよい、それに当時格安で部屋を貸してくれるアパートもあつたことも相まって、まあなんだかんだと過ごしている。

起き抜けの頭でぼーっと朝刊を流し読む。今日もコボちゃんは逸材だった。むしろコボちゃんは、しか読んでいない。

未だ頭がしゃっきりと冴えないせいか、目の前で動く2つの影。

2つの影とはいってもどこぞの料理長が探している食材ではどうやらないらしい。

…話が変わるが俺は初志貫徹を忘れない男。

それはなにも職業や生活習慣に限った話ではない。

いきなりなんだ、と思われるかもしれないが、今でも解せぬことが多い世の中、今日の前で起こっているおかしな状況を前にしても冷静に、なおかつ慎重になれる男。

そして言ってるのさ。

一つ大きく深呼吸をして、ゆっくりと口を開く。

「……何でいるの？」

「あら、おはよう八幡。…お兄様、どうぞ」

「ありがとう」

そう、目の前におらすは学年主席兼校内1の美少女（推定）な司波妹とその兄司波達也だった。

司波兄は司波妹に差し出されたコーヒーに口をつけ、深々と腰掛けたソファアの上でノートPCを弄っている。

「はい、八幡もどうぞ」

そう言っただけで差し出されたマグカップには司波兄同様コーヒー。

コーヒー豆の買いだめは昨日で切れていたはずだから、このコーヒーは司波兄妹の持参された物だということがわかる。

「あつ、どうも…」

なんて間抜けな返事がついぞ口先から出る。

しかし、なんで何か喋る前に『あ』ってつけちゃうんだろうな。英語単語なの？

とりあえず、入れてもらったコーヒーに口をつける。

「…美味え…」

いや、普通に美味しい。

見ると台所にはコーヒーマイルとケルトが出されていた。

ホーム・オートメーション・ロボット（HAR／ハル）が普及している先進国では台所に立つ女性はもちろん、男性（ここ重要）も、どちらかと言えば少数派になっている。

本格的な料理ならともかく、パンを焼く、コーヒーを淹れる程度のことには自分の手を使う者は、趣味でもなければほとんどいない。

ということとは、司波妹はそのほとんどいない少数派に属しているということだ。

別に機械音痴というわけでもあるまいに…

ああ、愛しい愛しいお兄様がいるからか。

なんて1人で納得していると、勝ち誇ったかのような司波妹の顔。

そして少し、くやしそうに二口目を啜る俺の顔を見て、満足げな表情を浮かべてから自分のカップに口をつける。

そのまま3人でコーヒーを嗜むこと十数分。

誰も口を開かず、無理に会話を作ろうとはしない。

…ちよっぴり、ほんのちよっぴりだが、こんな時間は嫌いではない。

というか、基本俺は1人な時間や静かな時間が好きなのだ。

しかし、どうしても人となると気まずさというのが生まれてしまう。

だが、お互いがお互いに無関心なこの位ならば丁度いいのだ。無関心であれば気まずい思いもしないし、不愉快な気分にもならない。

今日から始める、1人なんて怖くない対策その1、『他人を見たら他人と思え』である。ちなみにその2はない。

要するに、気まずさというのは『何か話さないと』『仲良くしないと』という強迫観念があるから生まれるものなんだと思う。

エレベーターに乗っていて隣り合った人に対して『やばいよー、2人つきりだよー、気まずいよー』と思う奴がいないのと同じだ。

しかし、それも時と場合による。

流石に今回のように寝起き即遭遇というのはあまり気持ちのよいものではない。

…いや、寝起きじゃなくてもこの兄妹に会うのは嫌だけど…。

「で、本当に何の用だよ。…つーかなんでお前らウチのカギ持ってんだ…」

というわけで、この静寂に包まれた中、司波兄に質問することにした。



すると司波兄は持っていたカップをゆっくり机に置き口を開く。

「ああ、師匠との修行ついでに、お前のCADの調整が終わったから届けてやろうと思つてな。」

それに、お前の妹から頼まれたことでもある」

そう言つて壁にかけてある銀色のトランクケースを顎でクイツと指す。

術式補助演算機 (casting assistant device)

通称CAD。デバイス、アシスタンスとも呼ばれている。

この国ではハウキ (法機) という呼称もつかわれているソレは、魔法を発動する為の起動式を、呪文や呪符、印契、魔法陣等の伝統的な手法・道具に代わり提供する現代の魔法技能師に必須のツールだ。

CADがなければ魔法を発動出来ないというわけではないが、魔法発動を飛躍的に高速化したCADを使わない魔法技能師はほとんどいないだろう。

但し、CADがあれば誰でも魔法が使えるというわけでもない。

CADは起動式を提供するだけであり、魔法を発動するのは魔法技能師自身の能力だとか。

つまり、魔法を使えない者には無用の長物であり、CADを所有するのはほぼ100%魔法に携わる者だ。

少し事情あつて司波兄にCADを預けなければならなかった俺は、言われて壁にあるトランクに手をかける。

一面銀色のトランクケースを開けると中には、組み立てて使うであろうスナイパーライフル型の特化型CADが収められていた。

組み立て式とは言つても単純で、銃身、銃口部分とスコープ、カードリッジという4つに分けられているだけ。

本体のライフルを取り出し、一通り組み立てて見る。

ただの調整つて、見た目丸つ切り変わっているつていうか、別物なんですけど…

確かに以前コイツに貰えるなら新型が欲しいとか言つた覚えある

が、コレ前の原型、スナイパーライフル型つてどこ以外なにも無いんですけど…。

グリップ部分にはトールラスシルバーのトレードマークが彫られ、そのマークから伸びる曲線の先にはSILVER HORN の文字。

それらが黒光りする本体に組み合わさりより完全さを表していた…要するにカッコ良さに磨きがかかっていた。

「好きだろう？そういうの」

少しドヤ顔を決め込んだ司波兄。

くそう…くやしい、くやしいけど嫌いじゃないですね、こういうの。

さらに言えば意味のわからない龍が巻きついた剣のマークとか、どこぞの正義の味方が愛用している双剣のマークとかだったらよりよかった。

一通り装着して試運転がてら魔法陣を発動させてみる。

と言ってもやり方自体がそう複雑なワケでもない。

銃身のレバーを手前に引き、自身のサイオン、要するに魔力的なソレを流し込むだけで基本的には稼働する。

そこから何かしらの魔法を弾として打ち出すタイプのCADなのだ…。

「…ちよつと、動かないんだけど」

不良品かしら？それともコレの調整者が不良なのかしら？

そんな俺の疑いの視線を難なく躲すと、司波兄は続ける。

「それはそうだろう。ウチは何も慈善事業で新型CADを作った訳ではない。そのCADのカードリッジの部分、それは使う魔法の種類によつて使い分けが必要で、使う前に専用のカードリッジに取り替えなければ発動出来なくなっている」

「ほーん、…で、その専用カードリッジってのは？」

「そうだな…簡単な物であればデパートの魔導具専門店にでも行けば置いてあるだろうが、より専門的な特別な物が必要なのだと、FLT社の第三課まで来てくれればその時、その時によつて応じよう」

あー、なるほど、金取るのね。

：なんてセコイんだコイツ：魔法使うのに必要なパーツ別売りとか、任○堂かよ。

そんな俺の心を見透かしたかのように司波兄はフツと笑う。

「どうせなら新型が欲しいと言ったのはお前だろう、心配しなくとも料金自体はかなり抑えられている。：そんな事よりもそろそろ登校の準備をしなくていいのか？まあ、お前が遅刻しても構わないと言うのであれば放っておくが…」

そう言つて時計を指すと、確かに登校に間に合わせるならそろそろ準備に取り掛かった方が良い時間。

なかなか腑に落ちないところを多々残しながらも、1つ重要な事を聞き忘れていた。

「：そういうえば、お前今、妹に頼まれたとか言つた？」

「……………」

「……………」

俺の質問に司波兄妹は顔を見合わせる。

妙な間が居間に流れ、どう切り出すのか待ってみると。

「：行こうか深雪」

「：そうですね、お兄様」

シラを切ることにしたらしい。

「おい、まて、何、小町が絡んでるの!?!どろりでおかしいと…おいつて!!」

俺の問いを返すことなくスタスタと行くドS兄妹（暫定）

小町のことや他にも色々聞きたいことはあるのだが…

1つ言えるのは…何だコイツら…。

満員電車という言葉は今や死語になっている。

勿論、今でも電車は一般的な通行手段なのだが、昔と比べ遥かに発展していると言うのが正しい。

昔は通勤通学ラッシュというあまりにも恐ろしい一種の拷問より酷い苦行が行われていたという、毎日身動き一つ取れないほどの人口密度の密室に押し込まれ、ソレに乗りながら通勤や通学をしたそう  
な。

かくいうウチの両親なども、そのラッシュとやらを避ける為に冬場は早めに家を出るようにしていたらしい。

冬の季節、出社出勤ギリギリの時間やちよつと遅めの時間だと余計に混んでいたのどか。

やはり人間、大人になつても冬の朝には弱いと見える。

誰だつてギリギリまで布団のなかでだらだらしていたいものだろう。

それでも、彼らが会社や学校に行かねばならないのには理由がある。

積極的、能動的な理由で行動する人間も確かにいるだろう。

だがまあ、会社がそれを要求するから、他人がそうしているから、流れからはじき出されないようにするためだから、なんて理由の奴だつているだろう。

つまるところ何かを得る為に、そして失わない為に人は行動するのだ。

キャビネットと呼ばれる二人乗り用のリニア式小型車両の中でネットのトピックニュースにサツと目を通し、最後のプリティーでキュアキュアなアニメの新作映画が今夏上映されるというニュースには目を引かれながらも端末のスクリーンを閉じる。

閉じられた端末のスクリーンに画面に映る自分の顔はやはり控えめに見ても並以上に整っていて、それでいながらどんよりとした瞳は並みどころかG級に腐っていた。

それでこそ俺。

これでこそ比企谷八幡。

これまでと変わることのない自分に満足して俺は目線を外に向ける。

しかしまあ：そう考えると便利な世の中になつたなあ：

例えば、今乗っているキャビネットだが、動力はもちろんエネルギーも軌道から供給されるので、車両のサイズは同じ定員の自動車の半分程度。

プラットホームに並ぶキャビネットに先頭から順次乗り込み、チケットから行き先を読み取って運行する。

似たような乗り物で昔はタクシーという運送機関があったそうだが、今はひとまず置いておこう。

要するに、何がいいかという学園モノによくあるような状況やSから始まるナンチャダヤスのような電車の中の出会いが恋愛に発展する…なんてシチュエーションは現代じゃまず起こり得ない。

友人と待ち合わせなんてことも出来なければ、駅を無駄にぶらぶらと散歩するなんてことも出来ない、ただ単に交通だけを目的とする非常にシステムチックなスタイルと言える。

このシステムを考えた人は偉大に違いない。

そういえば以前ラーメン屋でも同じようなシステムでカウンターの一席一席に仕切りを設け、さらには厨房から見えないように暖簾まですべてある一蘭の『味集中システム』というのがあったが、あれは…。

昔は『特許出願中』と書いてあったけど、特許は取れたのだろうか。

話が逸れた。

利便性は目的のためならず、車内に監視カメラ・マイクの類はない。

走行中に座席を離れることは出来ないようになってるし、席と席を隔てる緊急隔壁も装備されている。

それ以上はプライバシーが優先されるというのが社会的コンセンサスだからだ。

まあ、要するに車内は完全なプライベート空間と化していた。

ぼっちにとっては本当にいい時代である。

来たな…

来ましたよ、ぼつちの時代。

これからは常にプライベートタイムを大切にするぼつちが流行る  
(モテるとは言っていない)

そんなどうでもいいことを考えながらボーッと窓の外を見つめて  
いると、そろそろ学校近辺に到着し、電車は順調に低速レーンへ移行  
した：

その時だった。

「…さっむ」

突如として吹き上げた極寒の風に、車内では季節外れの暖房が作動  
する。

何事ぞ!?!とあたりを見渡すと前の車両にはまたもや見覚えのある

男女のペア：あつ（察し）

男の方が目を閉じて片手で礼儀的に謝罪する。

魔法力の高い魔法師は事象干渉力も強いとは言うが…この距離が  
離れていても干渉されるとか本当化物レベルだなアレ…。

そんな俺の驚愕とも驚嘆ともとれる感想を他所に、電車は駅へと到  
達した。

## 無銘4

休み時間ほど心休まらない時間もあるまい。

休み時間、1年A組の教室は、雑然とした雰囲気にもまれていた。

多分、他の教室も似たようなものだろう。

昨日の内に顔合わせを済ませた生徒も多いようで、既に教室のそこかしこで雑談の小集団が形成されていた。

ざわざわと喧そうに満ちた教室。

誰も彼もが授業の抑圧から解放されて、友人たちと親しく会話しながら、放課後の予定や昨日見たテレビ番組の話をしていたりするものだ。

飛び交う会話はまるで異国の言葉のようで、耳に届いても意味をなさない。

それにしても今日は初授業ということもあってか一段と賑やかな気がした。

おそらくは、先程講師が言った専門授業を誰と行くかというものだろう。

しかしまあ、『どこ行く?』という会話はあっても『誰と行く?』という会話にならないあたり、このクラスでは初まりにしてほとんどの人間が特定のグループを形成しているということなのだろう。

当然といえば当然だ。

学校という場所は単に学業をするための施設ではない。

要するに此処は社会の縮図であり、人類全体を箱庭にしたものだ。

だから、戦争や紛争があるようにいじめだってあるし、格差社会を引き写したようにスクールカーストだってある。

もちろん、民主主義そのままに数の理論が適用される。

多数派が、友達多い奴が偉いのだ。

クラスメイトの様子を俺は頬杖をついて、半分眠ったような姿勢で眺めていた。

睡眠は充分とっているし、眠くなどないのだが、昔から休み時間はこうして過ごしていたため、身体が条件反射で眠ろうとしていた。

うとうとしかけている俺の視界の前でひよいひよいと小さな手が振られる。

んっ、なんだあと顔を上げると、俺の前の席に昨日遭遇したクラスメートの北山雫が座っていた。

「おはよう」

くすつと微笑むようにして、北山は目覚めの挨拶をする。

ぼんやりと辺りを見渡したところ寝ていたのは俺一人のようなので必然的に彼女が話かけた対象は自分だと理解する。

「…なんか用か？」

「特に用事はないけど…比企谷君がいるなと思って…ダメだった？」

「…いや、ダメってワケじゃねえけど…俺と話していいのか？えつと…もう一人の…」

「ほのかならあそこ」

北山が指差した方向を向くと、相も変わらずうつつとうしく司波妹を取り囲む人垣の前でオロオロする光井ほのかの姿…いや、なおさら俺と話してる場合じゃないでしょ…

「ほのかはもう少し積極的に行かないと、私が手助けしているだけじゃダメ」

そんな俺の心情を見透かしたかのように、腰に手をあてて北山はフンスと息を巻く。

そして、はたと何かに気づいたのか、ぱんと柏手でも打つかのよう  
に両手を合わせた。

「比企谷君はこれからどこ回るか決めたの？」

「いや、決めてるっちゃ決めてるが、決めてないっちゃ決めてない」

俺がそういうとうまく意味が伝わらなかつたのか北山は小首を捻って下から覗き込むようにして俺を見た。

そのせいでかなり距離が接近してしまい、女子特有の甘い香りが辺りをただよう。



近い近い近い…何でコイツといい昨日の光井といいこうも無自覚なのん？

いいですか…そういう行為がですね…（以下略）

「…あー、つまりどこでもいいんだ、俺は。特に魔法関係でなりたい職とかあるわけでもないしな、どこに行こうと大して変わらん」

そもそも将来の希望職専業主夫だしな。

先程の時間にやった生徒会管理の調査アンケートでも進路調査の欄にそう記入したし。

…自分で書いておいて何だけど、魔法科高校広しといえどもこの職を希望したのは自分だけなのではないだろうか。

「ふーん、じゃあもう誰かと行く約束とか…した？」

少し躊躇いがちに、けれど確かな意思を感じさせる瞳で北山雫は俺の目を見つめてくる。

何だ今の言い方は。『一緒に行きたいんだけど、もう決めちゃってたら、残念だなあ』みたいな意図を孕んでそんな言葉じゃねえか。

まさしく不意打ちだった。

その奇襲のせいで、俺の記憶の扉が新聞の勧誘並みの勢いで激しくノックされる。

確か昔にもこういうことがあったような…

そう、それは中学に入ったばかりのころ、俺がクジ引きで学級委員になっちまった時、可愛い女子が立候補して、その女子が『これから一年間よろしくね』とはにかみながら言い…。

っああっ!!あっぶねえ!!またあの意味が全然わかんねえ思わせぶりなセリフに騙されて大怪我するところだったぜ!

既にそのパターンは一度味わっている。

訓練されたぼっちは同じ手を二度も引かなかったりはしない。

じゃんけんで負けた罰ゲームの告白も、女子が代筆した男子からの偽ラブレターも俺には通じない。

百戦錬磨の強者なのだ。負けることに関しては俺が最強。

OK。落ち着いた。こういうときはとりあえずオウム返しをするのが1番無難なやり方である。

つまり、オニドリルはきつとぼっちの達人。

なので、質問に質問で返すことにした。

「お前は決めてるのか？」

「私？私ほのかと…」

急に聞き返して戸惑いでもしたのだろうか、一瞬の間が空き北山は光井の方に目を向ける。

「零ー!!」

人ゴミを掻き分け北山の名前を呼びながら這い出てくる光井と、それに続く司波妹。ああ…なるほど。

確かに校内一（推定）美少女の司波妹とこの高校以前（推定）からの友人であろう光井がいるのなら回る相手がないということはないだろう。

「お待たせしました。さて、それでは光井さん北山さん行きましようか」

愛しのお兄様  
二科生を馬鹿にされ、うんざりしていたであろう司波妹が多少の駆け足でこちらに近寄ってくる。

ちよつと!!後ろの群衆（主に男子）が羨ましそうにうろろうしてるんですけどー!!ちよつと気の毒にも思えてくるぞ…!

「ごめんなさい、急に会話に割り込んで」

「ううん、助かっちゃった…とところで…」

光井と会話していた司波妹と目が合う…これはマズイですよ!!  
ゆっくり近づいてくる司波妹に対し、静かに席を立つ。

と言うかあれだ、あいつが動いた後に後ろの群衆が集まってきて、あれよあれよという間に皆が押し寄せてきて、ついには俺の席まで占領されてしまった。

押しよせられる人数に比例して俺の存在感もまた希薄になっていく。

なんだよ、俺忍者かよ。九重寺か甲賀の里にでも就職した方がいいんじゃないの?。

では、拙者、この辺りでドロクさせていただくでゴザル。

まあ、言うまでもなく、いつでもどこでもドロクと消えてるような

ものだけだな。

工房工作室と呼ばれる主に実験道具や魔道具作成を行っている建物がこの第一魔法科高校にはある。

1-Aの生徒たちは専門授業の見学時間が始まるとめいめいに己の希望する場所へと見学を繰り出した。

その内で今回俺が向かうのがこの工房である。

この部屋で行われる今日の授業は放出系統魔法がメインらしく、工房、工作室という語感に反して工学実習室は小規模な工場といった趣の建物だ。

今日は1人でこの工房を見学する、予定だったのだが…。

実際そこへ向かって見るとわらわらと司波妹に人だかりが集まっている。何？大名？

…というか司波妹も工房選択かよ、くっそ…なんでいるんだよ…。

闘技場にしておけば良かった…。

ぬかったぜ…。

ちゃんと調べてから選ぶべきだった。

司波妹の周りには先程から群がっていた男子集団もいれば、北山や光井の姿も見つけることができた。

ちらほら数えても教室の6割くらいの人数がここへ来ていたようだ。

人込みはあまり得意ではない。たまに休日出かけてみても人が多いだけでもう帰りたくなってしまふ。

自然と俺のポジションニングはその集団の最後尾につけていた。

さすがは俺、自ら進んで殿を務めるなんて戦国武将なら褒賞ものである。

先程も述べたように、ここは魔法に必要な道具を作成する場所だ。

そこは単純に校内と研究施設というだけでなく、周辺に解放されたスクリーンシアターや研究を一望できるラウンジなどアミューズメント性にも富んだ場所だった。

これが無意識に選んでいるのだとしたら司波妹の引きの良さというか、天性の勘は素晴らしいものだ。また、逆に大勢人が集まることを見越してここを選んだのだとしても、その気配りには舌を巻く。

何より、こういうメカメカ系の展示なんかはぼっちの俺が1人で見ても楽しい。

トランペットを欲しがる少年のように、ガラスにぺったりと張り付くしながら、機械がうおんうおん動く様子を眺めているとワクワクするのだ。

『俺たちは機械じゃない』というのは、管理されることや苦役に投入されることへの反発心から出る言葉なのだろうが、まったくもってその通りだ。

俺たちは機械ではない。

だから、時々俺みたいにどこにも絡まない使い道のよくわからんギアが存在していたりする、これがミニ四駆だったらタミヤに問い合わせちゃうぜ。

厳密に言うのならこんな機械や魔道具、魔法にだって無駄な部分は存在する。

俗に言う『遊び』といわれる個所だ。

機械ならチェーンの余った部分や余計なギア比、魔法なら直接は必要の無い起動式なんかをこう呼ぶこともあるらしい。

こいつがあることによつて魔法式自体に余裕が生まれ、より完全な発動が出来たりするのだそうだ。今日講師が言っていた。

魔法にも人にも遊びが必要なんだと。

まあ、ぼくは遊びにも誘われたいわけですが…。

俺は集団から適度に距離を取りながら、下で行われている放出システム魔法の実験を見て回った。

前はきやつきやと小声でお喋りをする者やじゃれ合いを楽しむ者、司波妹にアピールしようと躍起になる者。

後ろを振り向いても誰もいない。

後方はシーンと静まり返り、耳に痛いほどだ。

だが、その静寂を前方同じくざわざわとした雑音が切り裂いた。

「比企谷。お前もここにきていたのか」

再び後ろを振り返ると司波兄とその友人（であろう）数名。

「お前も工房見学か？」

「まあ、そんなところだ」

とそっけなく答えるも向こうは大して気にも止めずいつもの無表情を貫いていた。

すると後ろにいた男子生徒が遠慮がちに司波兄に耳打ちをする。

「達也、コイツは？見たところ一科の生徒っぽいが…」

引き気味に言われ、男子生徒の胸元を見ると司波と同じく二科生のようだ。

ああ…なるほど…一科と二科の溝は何しも一科を二科が見下しているだけではない。

二科生もまた一科生に対しては複雑な感情があるのだ。

そんな二科生同士の中に俺がいるのは気まずかろう、ここはさっさと退散するのが吉だ。

首だけペコつと小さく下げ、その場を後にしようとする…その肩をガシツと掴まれた。

「まあまあ、レオ、こいつは比企谷八幡。この男は目と根性は腐っているが、腐っているだけあってリスクリタールの計算と自己保身に関してはなかなかのものだ。…害にはならん、だろう？」

「何一つ褒められてねえ…紹介する気ねえだろお前。違うでしょう？リスクリタールの計算とか自己保身とかじゃなくて、ただ常識的な判断が出来ると言って欲しいんだが」

しかも疑問系だし、慇懃無礼とでも言うのだろうか。やはりとても嫌な奴である。

「ほーん…おっと、自己紹介がまだだったな。西城レオンハルトだ。親父がハーフ、お袋がクォーターなせいで外見は純日本風だが名前は

洋風、得意な術式は収束系の硬化魔法だ。レオでいいぜ」

「はあ…どうも」

西城たらゆう男子生徒に促されて、俺は会釈する。さつき名前は司波兄が口にしたが、多分ここはこのまま自己紹介タイムに入る流れなんだろう。

「1年A組比企谷八幡です。えーつと、得意な術式は…」

「え、なにになに？司波君の友達？あたしは千葉エリカ。よろしくね比企谷君？」

俺の自己紹介は、これまた司波兄の後ろにいた少女の声に遮られた。

見ると、明るい栗色の短髪に、無駄のないスラツとしたプロポーション。

ハッキリとした目鼻立ちも含め、司波妹に負けじとも劣らない出で立ちの陽性の美少女で、有り体に言えばリア充ど真ん中系の女子であった。

その千葉さんとかいう女子は笑顔と共に右手を差し出してくる。

…ああ？握手？なんだってこうリア充系の奴は馴れ馴れしいのかね？まったく、ほんとふざけんなよ。アメリカ人かってんだよ。

「お、おう…」

躊躇いがちに右手を取るも、おかげで変な返事が出てしまった。

しかし千葉…千葉ねえ、その苗字に聞き覚えがない訳ではないが、必ずしもあの数字付きとも限らないし、もちろん、我が愛しの故郷の方とも関係はない。

まあ別にこの手の女子と今後関わることもないので、別に、どうでもいいことではあるのだが。

なんならどの手の女子とも関わりがないまである。

「あの…」

そんなどうでもいいことを考えていると、また、声を掛けられた。

「私、柴田美月といいます。よろしくお願いします」

「比企谷八幡です」

そう言われて何度目かの自己紹介。

千葉とは対称的に気弱そうな口調と外見。人を見た目で判断するのは危険かもしれないが、自己アピールが得意なタイプとも思えない感じの女子だった。

しかし、メガネを掛けた女子は今の時代、かなり珍しい。

二十一世紀半ばから視力矯正治療が普及した結果、この国で近視という病は過去のものとなりつつある。

余程重度の先天性視力異常でもない限り、視力矯正は必要ないし、視力矯正が必要な場合でも人体に無害で年単位の連続装着が可能なコンタクトレンズが普及している。

わざわざメガネを使う理由があるとすれば、単なる趣味かファッションかあるいは…。

「しかしお前はここにいていいのか？一科生には引率の講師が付くと聞くが」

俺の思考は、司波兄の声で中断された。

ただそれはタイミングのいいリリーフでもあった。

あまり込み入った人の事情に足をつ込むのはよろしくないし、知ったところで何か得をするわけでもない。

司波兄の指摘を受け、辺りを見渡すと先程までいた司波妹の大名行列的な集団はかなり離れている。

どうやら司波兄達と少し長く喋りすぎてしまったらしい。

司波妹達を引率する講師はすでにこのメカメカロード（仮）を抜けた場所へ移っていた。

「あ、ああ、こう俺の中のロボット魂が騒いでだな…あの、俺はそろそろ行くが？」

暗に別れるタイミングを打ち出すように司波兄に持ちかける。

これはぼっちならではの気の使い方もかもしれない。

1人で街中にいるとき、知人にばったり出くわしてお互いに二言三言会話してみたものの、『これってどのタイミングで別れればいいんだろう…』みたいな微妙な空気を作り出したりすると何故かこちらが

悪い気がして申し訳なると似たようなもんだ。

予想外の邂逅はすぐさま撤退すべし。慢心よくない。

大食いの赤い人や作品は違えど金色の王様が教えてくれた。

「…いや、俺達もそろそろ出ようか」

俺の言葉に続くように司波兄が退出を促す。

柴田はすぐさま頷いているが、西城と千葉はかなり不満そうにゴネた。

「もう行くのか？」

「まだ時間残ってるよ？」

確かにまだ授業時間としては残っているし、退出には少し早いようにも思えるが…。

司波は無言で通路の反対側へ目を向けた。

俺達もつられて振り返る。

そこでは、後ろから来た一科生を引率している教師が、苦い顔でこちらを睨んでいた。

「…お前と会う前に少しあつてな、俺達も出ることにするよ」

司波の言葉にさつとあらぬ方向を向く千葉と西城。

…おい、お前ら何したんだよ。あの講師めっちゃニラんでるんだが…。

今ちよつと会話した程度じゃねえだろ。

司波の言葉に首をすくめた千葉と西城は、こそこそと柴田と司波の後ろに続いて退出して行った。



## 無銘5

昼休み。

先程の専門授業中に歩き回ったおかげもあって、わりとベストに近い昼食スポットを見つけたことが出来た。

部活塔の一階。本校舎から少し離れた場所にある木陰に腰を降す。位置関係で言えばちょうどバイアスロン部の練習場を眺める形になる。

購買で買ったウィンナーロールとツナおにぎり、ナポリタンロールをもぐもぐと食べる。

安らぐ。

バイアスロン部とは、スケートボード&スノーボード(s s ボード)という伝統的なスキーと射撃の二種競争というわけではない。

春、夏、秋はスケートボード、冬はスノーボードを使い、移動しながらコースに設置された的を魔法で撃ち抜く競技である。

パンパンと鳴り響く射撃の音が徐々に一定になってくる。

春の気温と相まって俺の眠気を誘っていた。

昼休みは女子バイアスロン部の子が自主練習をしているようで、コースを一周しては的に向かって射撃を放っている。

その動きをゆっくり目で追いながら本日の昼食を平らげた。

じきに昼休みも終わるだろう。

すずーっとパツクのレモンティーを啜っていると、ひゅうと風が吹いた。

吹き抜けるような強い突風はうとうとした眠気を覚ますのには丁度いい。

こんな風を肌で感じながら一人で過ごす時間は嫌いじゃない。

そういうえば、さつき昼食を買う時食堂の方が騒がしかったが、何かあったのだろうか？

まあ、何かあったところで俺には関係ないのだが、なんというか内輪ノリで騒ぐというのがぼっちとしては理解ならん。

ぼっちがノリが悪いと言われる所以だ。

別に恥ずかしいわけではないのだ。

ただ、いろんなことを考えてしまうから簡単には動けない。

人の迷惑ではないだろうか、危なくはないだろうか、自分が入ることでの楽しい空気が乱れないだろうか…とかね？

まあ、単に俺が内輪ウケとか内輪ノリとかが嫌いなだけかもしれないが…あ、でも内輪モメは好きだ。なぜなら俺は内輪にいないからな！

そんな本当にどうでもいいことを考えながら携帯端末を開く。

授業には未だ時間があるし、読書でもして時間を潰すか。

しかし、雨じゃなくて良かったぜ…さしもの俺も雨に濡れながら飯を喰う趣味はない。

携帯端末でお気に入りの書籍サイトにアクセスする。

「あら？貴方は…新1年生ですね？どうかされましたかこんな所で」

携帯を眺めていると、頭上から声が降りかかって来た。

チラリと横目で見ると、まず目についたのは制服のスカート。

それから左腕に巻かれたランキー付きのCAD。

俺の記憶によれば、生徒で学内におけるCADの常時携帯することが認められているのは、生徒会のメンバーのみ。

俺を新1年生と言う口調からしてつまりこの人は生徒会に所属している先輩ということだ。

掛けられた声の方へ向かって顔を上げる。

ふわふわとした長い髪が後ろで巻かれ、つるりとした綺麗なおでこがきらりと眩しい。

パツと見小柄な身長に加え男を虜にしそうな妖艶さを醸し出しており、なんともコケティッシュな出で立ちの女子生徒がそこにいた。

とは言え、先輩の、しかも生徒会を務めるような優等生と積極的に関わり合いになりたいとは思わないし、なんならどんな人物でも関わり合いになりたいとは思わない。

「おや、貴方もスクリーン型ですか、感心ですね」

だが、相手はそうは思わなかったようだ。

俺の誰だこいつという視線に、少しはにかんだ微笑みを向けながら端末を覗き込んでくる。

その瞬間、ざわざわと心にさざ波が立つ。

無論、一目惚れなんかじゃない。これは単なる警戒警報だ。

しかし相手はそんな俺の心情とは逆に話を続ける。

「当校では仮定型ディスプレイ端末の持ち込みを認めていません。ですが残念なことに、仮定型を使用する生徒は大勢います。でも、昨日の1年生といい貴方といい、入学してからもスクリーン型を使っているんですね」

「…はあ、単に読書するのに都合いいってだけですが…」

言われて自身の端末に視線を落とす。

…まあ、つつても俺の携帯なんて着信ねえ、メールもねえ、電池もそれほど残ってねえ。オラこんな携帯嫌だ。

そんな訳で使い所があまりなく多機能付き目覚まし時計くらいの認識しかなかった俺の携帯だが、その女子生徒は一層感心の色を濃くした。

「動画ではなく読書ですか、ますます珍しいです。私も映像資料より書籍資料が好きな方ですから、何だか嬉しいですね」

この人の言う、昨日の1年生、というのが誰かは知らないが、確かに映像の方が書籍より好まれる時代ではある。

が、だからと言って読書を好む者がそこまで珍しいということはない。

どうやらこの上級生は、見た目の印象こそコケティッシュな雰囲気はあるものの、人当たりがよく、俺に対しても距離を感じさせない馴れ馴れしき、もとい人懐っこさがあるようだ。

…やはり危険だ。

「あつ、申し遅れました。私は第一高校の生徒会長を務めています、七草真由美です。ななくさ、と書いてさえぐさ、と読みます。よろしくお願ひしますね」

「はあ。比企谷です」

名乗られたので名乗り返す。どうやらこの学校の生徒会長の名前は七草真由美というらしい。ちい覚えた。

しかしまあ、七草ね…。

この魔法が実在するこの時代、現代魔法は先天的素質に左右されている。

よって血縁による強化が企画され、最強の魔法使いとして日本の魔法界に君臨する十師族と呼ばれる一団があるのだ。

その内の一つが七草家。

十師族とそれ以外の人々とは圧倒的ともいえる差があり、その十師族中でも七草といえればかなりの有力勢力だったはずだ。

まさかこんな所で遭遇するなんて考えても見なかったが。

「比企谷君…」

七草会長は一瞬だけ考えるような間を取り、俺の顔をまじまじと見つめる。

その見られ方は特に目元を見られているようで、なんとも恥ずかしい。…そんなに腐ってるように見えますかね、俺の目（自覚あり）

会長はそのまましばらくじっと見つめると、突然左手を俺の頬に添え、何か大切な物に触れるかのようにそっと撫でる。

「な、な、なんでしゅ…なんですか」

突然すぎることに返事も噛みまくりだった。

そもそも人と話すだけでも緊張するっていうのに、それが年上の女性とくればなおさらだ。

「…ぐ、ぐごめんなさい…ただ貴方の雰囲気があんまりにも私の妹に似ていたものだからつい…本当にごめんなさいね」

ちろつと桜色の舌を出して七草会長が謝罪する。

その庇護欲をそそる姿に急速に罪悪感が襲ってきた。何か言い訳をしなければ！

「いや、その、俺耳とか弱いんで」

戸惑った様に言うと、クスクスと七草会長は笑う。

「ふふ、…あら、もうこんな時間。それでは比企谷君。もし、お時間に余裕があるときでも生徒会室に遊びにいらしてください。歓迎しま

すよ」

七草会長は冗談めかすように、腰に手を当て前に屈むと、右目でウィンクした。

時刻は13:30分。次の授業の予鈴が鳴っている。

最後にぱあつと華やぐような笑顔を浮かべて、会長は胸の前で小さく手を振った。そしてととと去っていく。

勿論、俺が自ら生徒会に行くことも、あの会長を訪ねることもないだろう。

記憶が確かなら第一高校の生徒会は生徒会長こそ新入生代表が選ばれるにしても、他のメンバーはその会長が指名するシステムになっている。

つまりとところ、全員が会長の完全身内ということだ。

そんな中に入っていくのは大変気まずいし、そこまで気が使えなくはない。

というか、あれだよ？俺とかめっちゃ気が使えるよ？

気い使ってるから誰にも迷惑かけないように静かに隅っこにいる。

話しかけたりしないし、並んで歩かず一步後ろ歩くし、誰かの予定を邪魔しないように誰も誘わないし。気遣いの達人すぎて操気弾くらいらいなら今すぐ撃てるレベル。

そんなどうしようもなくくだらないことを考えながら、次の授業会場である射撃場へ足を進めた。

・  
・  
・

入学二日目にして早くもぼっちを決め込んでいた俺は1人夕暮れの校門前で佇んでいた。

学校からの帰り道、国道を右に行けば大きな商店街へと行きつく。

映画館に書店、ゲーセン、漫画喫茶とそれなりに時間を潰せる場所だ。

どの辺をぶらぶらしようかなーなど考え、気持ちわくわくさせながら鼻歌交じりに校門まで来ていた。そんな時だった。

「お兄様…」

「謝ったりするなよ、深雪。一厘一毛たりとも、お前の所為じゃないんだから」

「はい、しかし…止めますか?」

「…逆効果だろうなあ」

「…そうですね。それにしても、エリカはともかく、美月があんな性格だとは…予想外でした」

「…同感だ」

一歩引いた所から見守っている…いや、あれは眺めている?

…まあ、とにかく事態を俯瞰している司波兄妹の視線の先。

校門の下真ん中には一触即発の雰囲気で睨み合う新入生の一団がいた。

その片方は確か森…森山?とかいう司波妹の取り巻きの1人だった気がする。それに加え1ーAのクラスメイトが何人か。

もう一方の構成メンバーは司波兄チームの柴田、千葉、西城だった。

あの…そこに陣取られると邪魔なんですけど、そういうのは学校でやるなよ、家でやれ家で。

…いやまあ、本当にやられても困るんだけど。

邪魔だ散れ!という意味を込めて、固まっている集団を注視するも、彼らは当然のことながら気が付く訳もない。

すると、偶然にも司波兄の目線が俺と合う。

一瞬驚いたような表情を取るものの、すぐに目線を逸らし、何も見なかったかのような無表情フェイスに戻った。

…おい、俺はお前が俺を見たのを見たぞ。

「いい加減に諦めたらどうなんですか? 深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挟むことじゃないでしょう」

ほーん、何となくこの出来事の一端が見えて来そうな気がしなくも

ない。

つまり、司波妹を待つていた司波兄に1ーAの連中が難癖でも付けに行ったとかそういうこと?…自分で言っていてよくわかっていない。

見ると、1ーAサイドの集団の中には光井と北山の姿。

2人ともこの一触即発の状況に戸惑っている。

つまり、この集団のように一級戦闘態勢ではないようだ。話を聞くならこいつらしかないか…。

面倒事に巻き込まれるのは勿論ごめんだが、校門前で固まられているこいつらのせいで、この学校から出ることが出来ない。

ならば、その原因くらいは把握しておきたいものだろう。

あれだ、電車が遅延した時にその理由を聞かないと凄くイライラする、みたいなものだ。

「…これ、どういう状況?」

「あ、比企谷くん」

近寄って聞いて見ると、俺の存在に気がついたのか光井と北山が振り返った。

「…司波さんのお兄さんと司波さんが帰ろうとしていたところは一科生が割り込んでウィードだブルームだっって言い争ってる」

北山が事実だけを淡々と教えてくれた。

なるほど…これで、一応は今回の件の全容は理解出来た。

つまりは、ここでも一科と二科の差別意識が如実に出ているのだ。

「別に深雪さんはあなた達を邪魔者扱いなんてしていないじゃないですか。一緒に帰りたいかと思ったら、ついてくればいいんです。何の権利があつて2人の仲を引き裂こうとするんですか!!」

柴田が切れている。丁寧な物腰ながら、容赦なく正論を叩きつけている。

新・柴田が斬るくらいズツパリ切り裂いていた。

「…おい、あいつ司波兄妹を引き裂くとか言ってるぞ」

「…まあ、司波さんも結構ブラコン気味っぽいし」

俺の小言に北山が付き合ってくれ。

俺の小言に付き合ってくれるなんて、こいつ実はいい奴なのだろうか。

だが、いい奴なのだとしたら話を広げてやれないのは申し訳ない。

あまりにも申し訳ないので今後は迷惑をかけないように話しかけないようにしたい所存までである。

「引き裂くとか言われてもなあ…」

「み、美月は何を勘違いしているのでしょうか？」

「…深雪…何故お前が焦る？」

「えっ？いえ、焦ってなどおりませんよ？」

「…そして何故に疑問形？」

ギブ。

さっきのやり取りだけでラーメン無限大を食らったときくらい腹一杯だったのに、さらに野菜マシマシ化調マシくらいの重量だわ、これ。

「いや、あいつはかなりのブラコンだろ。俺も妹がいるがあそこまで酷くはねえぞ。一周回ってドン引くレベル」

「へえ…比企谷君も妹いるんだ」

「ああ、自慢の妹がな。可愛い、綺麗、器量好しと3K揃ってると自負しているが…よかった、あそこまで酷くはなかったらしい」

「いや、その反応は正直、かなりのシスコンだと思うけど…」

北山が半ば引きながら返答する。

「馬鹿な！俺は断じてシスコンなどではない。むしろ妹としてではなく、1人の女性として…ああ、もちろん冗談です、やめろ、CADに手を掛けようとすんな」

北山が驚愕と恐怖の入り混じった目で俺を見て、CADに手をかけ始めたあたりで言葉を止めた。最後まで口にしていたら俺に攻撃魔法が浴びせられたに違いない。

そんなバカなやり取りをしている間に、司波妹親衛団（仮）と司波兄さんチームはますますヒートアップしていた。



「僕たちは彼女に相談することがあるんだ！」

「そうよ！司波さんには悪いけど、少し時間を貸してもらっただけなんだから！」

「はん！そういうのは自活（自治活動）中にやれよ。ちゃんと時間取ってあるだろうが」

「相談だったら予め本人の同意をとってからにしたら？深雪の意思も無視して相談も何もあったもんじゃないの。それがルールなの。高校生にもなって、そんなことも知らないの？」

「うるさい！他のクラス、ましてウイードごときが僕たちブルームに口出しするな！」

「同じ新入生じゃないですか。あなたたちブルームが、今の時点で一体どれだけ優れているというんですか？」

決つて大声を張り上げている訳ではなかったが、柴田の声は不思議と校庭に響いていた。

あー、アウト。これはアウトですわー。

そも、このエリート思想やこの一科と二科というわけ方は学校の講師と制服のエンブレム不足から始まったと言われている。

つまるところ、初めから補欠ウイードなんてシステムはなく“誰かがちっぽけな自己欲を満たすために作り上げた1つの呼び方にするにすぎないのだ。

だからと言ってこのちっぽけな悪意はバカに出来ない。

悪意は広がり、それは習慣となった。

要は“みんな”が“みんな”二科生をバカにし始めたのだ。

“みんな”が言うから“みんな”がそうするから、そうしないと“みんな”の中に入れてもらえないから。

でも“みんな”なんて奴はいない。喋りもしなければ殴りも怒りも笑いもしない。

集団という魔法が作り出した幻想だ。

気づかない内に生み出していた魔物だ。

個人のちっぽけな悪意を隠すために創造された亡霊だ。

仲間外れを食い殺して仲間にする呪いを振りまく妖怪変化だ。

だからこそ、その悪意に立ち向かうのであれば、戦闘は免れない。

「…どれだけ優れているか知りたいのなら教えてやるぞ」

学校内でCADを認められているのは生徒会とその役員のみ。

学外における魔法の使用は法律で細かく規制されている。

だが、CADの所持が制限されている訳でもない。

意味がないからだ。CADは今や魔法技能師の必須の道具だが、魔法の使用に必要不可欠ではない。

だからか、CADを所持している生徒は、授業前に事務室に預け、下校時に返却を受けるという手続きになっている。

故に、下校途中である生徒がCADを持っているのは、別段おかしなことではない。

「特化型デバイス!?お兄様!」

司波妹が声を上げ司波兄が手を伸ばす。

それはCADを抜いた生徒があまりにも魔法技能師戦に慣れた美しく淀みのない所作だったからだ。

魔法は才能、血筋によるところが大きい。

つまりは、優秀な成績でこの学校に入学した生徒であれば、入学したばかりであっても、親や家業の手伝いといった形で実戦経験のある者も少なくない。

しかし一瞬にして事態が逆転する。

「ヒッ!!」

悲鳴を上げたのは銃口を向けられていた西城でも柴田でも勿論司波兄妹でもない。銃口を突きつけていた生徒の方。

CADは彼の手から弾き飛ばされていた。

そしてその眼前では、伸縮警棒を振り抜いた千葉が笑みを浮かべている。

「この間合いなら身体を動かした方が早いよね」

周囲があっけにとられている。当たり前と言えば当たり前だ。

この実力至上主義の魔法科高校において一科生が二科生に遅れを取ったのだから。

しかし…

「…まずいことになったな」

「比企谷君?」

これでひとまずは丸く収まるだろうと踏んでいたのか光井が不思議そうに振り返る。

「ぶ、ブルームがウィードに劣るなどありえるかああああ!」

「舐めないで!!」

呆気にとられていた1-Aの集団が再び我に振り返り逆上する。

その怒りの炎は凄まじいものでサイバーファイヤーファクトリー社の社長ゴミ●ルーン氏も真つ青なレベルの炎上ぶりだった。

「やめなよ!!」

光井が逆上する男子生徒を止めようとするも逆に突き飛ばされてしまう。

「…無事か?」

「あ、ありがとうございます」

倒れ込んだ光井を起こすも、まあ、ここまで炎上するとちよつとやそつとじゃ鎮火出来ない。

どうしたものかと考える。

「…何かあいつらの気が引けるモンでもあればな…」

「…気が引けるもの…そうだ!!私の魔法なら!!」

「え?は?お、おい」

「何する気!?ダメだよほのか!!」

困惑する俺とこれから光井が何をしようとしているのか理解した北山が止めに入る。

が、時すでに遅し。

光井のCADは組み込まれたシステムが作動し、起動式の展開が始まる。

式の展開が完了後、展開された起動式を無意識領域内にある魔法演算領域に読み込み、座標、出力、持続時間等の数字を元に魔法式が組み立てられる。

起動式とはいわば魔法の設計図だ。

その設計図を元手にCADと自身のサイオン（魔力）を使い魔法を出す。

要するに物体にある本来の情報をCADという道具を使って別のものに情報を書き換えているのだ。

現象には情報が伴う。

逆に言えば情報という式さえ変えてしまえば一時的に現象が変わる。

これがCADを使った魔法システムだ。

しかし、以前も言ったようにCADとはただの機械でしかない。

魔法技能師からのサイオンを供給されなければただのガラクタ。

つまりところ家電製品のようなものだ。

コンセントからの電気供給、ここでいう魔法技能師からのサイオンが供給されなければ魔法は発動しない。

例えば、別のサイオン自体を展開中の起動式に打ち込まれたり、式に少しでも変化を加えられたりすると、そのまま式が合わずに霧散する。今のよう。

「止めなさい!! 自衛目的以外の対人攻撃魔法は、校則違反である前に、犯罪行為ですよ!」

光井のCADが展開中だった起動式がサイオンの塊によって碎け散らされる。

声のする方向を振りむくと、そこには昼間の生徒会長こと七草真由美。

それに加え、入学式初日。俺を馬車馬のようにコキ使っていた女子の先輩もいた。

「あなたたち1ーAと1ーEの生徒ね。事情を聞きます。ついて来なさい」

硬質な声で命じられ、彼女のCADは既に起動式の展開も済ませていると脅しの目的も含めてCADを見せびらかしている。

ここで抵抗の素振りでも見せようものなら、即座に実行使されることは想像に難しくない。

光井も北山も先程まであれ程炎上していた奴らも、言葉もなく硬直している。

雰囲気にも飲まれ動けなくなった西城や他の司波兄さんチーム（仮）の奴らを横に司波兄は先輩の前に出る。

「すみません、悪ふざけが過ぎました」

先輩にとって、司波兄妹は当事者にすら見えていなかったようだ。

「悪ふざけ？」

突然出て来た司波兄に、訝しげな視線を向けて問い返す。

「はい。森崎一門のクイツクドロウは有名ですから、後学の為に見せてもらうだけのつもりだったのですが、あんまりにも真に迫っていたもので思わず手が出てしまいました」

：驚いた。いや絶句したという方が正しいかもしれない。

他の1年生も今までとは別の意味で凍り、先輩は警棒を手に行っている千葉と、地面に転がっている拳銃型のデバイスを一瞥し、冷笑する。

「ではあちらの女子が攻撃魔法を起動していたのはどうしてだ？」

「驚いたんでしょう。条件反射で魔法を起動出来るとは、流石一科生ですね」

真面目腐った表情で答えていたがその声は何処と無く白々しい。

「君の友人は、魔法によって攻撃されそうになっていた訳だが、それでも悪ふざけと主張するのかね？」

「攻撃といっても、彼女が編成しようとしていたのは目くらましのための閃光魔法ですから。それも、失明したり視力障害を起こしたりする程のレベルのものではありませんでしたし」

再び、息を呑む気配。冷笑が感嘆に変わる。

「ほう？…どうやら君は、起動式が読めるらしいな」

起動式は魔法を発動させるための膨大なデータの塊だ。

魔法技能師はそれを直感的に理解し、魔法を行う。

要は、PCに取り込んだ写真の画像のようなものだ。

1と0のデータでのみ画像を展示しているPCだが、俺達からすればそれはそのまま取った写真そのものに見える。

が、起動式を読む、ということはその画像を1と0で分けて見ることが出来るということだ。

つまり。普通の人間ならば意識して理解するなど不可能だ。

「実技は苦手ですが、分析は得意です」

だが司波兄は事も無げに、その非常識な技能を『分析』の一言で片付ける。

「…誤魔化すのも得意なようだ」

値踏するような、睨みつけるようなその中間の眼差し。

そんな眼差しに何か言おうとしている司波妹を片手で制し、その視線はこちらを向いている。

横を向けば力うなだれている光井の姿。

俺ならばここから先どう動くのかを予想しきったかのように司波兄は黙って俺を見つめ続けていた。

…本当、コイツのこういうところが嫌いだよ、俺は。

「…とにかく、状況判断はしなくてはならないから、君とその女子は…『いや、ここで連行されんのは光井や司波兄じゃねえだろ』」

俺の反応に周囲がざわついた。

それまで空気と同化していた俺に周囲の視線が集中する。

「何だど?…君は確か…どういふことか説明してもらおうか」

となれば、その発言の発端であり、かつ立場の弱い俺に先輩の矛先が向かうのは自明の理。

というか今気が付かれたんですね、俺。

七草会長とか驚いて目を丸くしちゃってるし。

「どうもこうも無いですよ。そいつの言うように一科生は魔法を見せてびらかしていただけですし、危なくなってきたときに光井に魔法を使わせる発端を作ったのは俺です。なら、その結果は魔法を行使した者ではなくその原因に求められるべきでしょう」

「えっ!? そんな!? ダメだよ比企谷くん!? これは私がやったことで…」

「…おい」

俺のやろうとしていることに気が付いたのか光井が止めに入る。黙っていればこのままお咎めなしに出来そうなものを…真面目というか、頑固というか、ああ、違うな、これは偏屈というやつだろう。

だが、偏屈ぶりで負ける俺ではない。

「いや、実際余計な事言ったのは俺だしな、それで誰かに面倒事を被って貰うのは申し訳ない」

「ほう、なら君の言う原因とやらは君自身ということになるが?」

先輩は何か面白い物を見るような目つきで俺を見る。

「まあ、ここで言う光井が魔法を使う発端になったのは俺ですし、そういうことになるかもしれませんが」

横で騒いでいる光井より先に前に出て、先輩の問いに改めて首肯する。真正面から首肯されたこともあり面でも食らったのか、先輩はどうしたものと頬を掻いた。

「摩利、もういいじゃない。達也くん、比企谷君。本当にただの見学だったのですね?」

会長のせつかくの助け舟だ、乗らない手はない。

今まで通り真面目腐った表情で頷く司波兄に続き首を縦に振る。

すると七草会長は何となく、得意げに見える笑顔を浮かべこちらに近づいて小声で、貸し1つ、ね、と呟いた。…いや、貸しって。

「生徒同士で教え合うことが禁止されている訳ではありませんが、魔法の行使には、起動するだけでも細かな制限があります。このことは一学期の授業で教わる内容です。魔法の発動を伴う自習活動は、それまで控えた方がいいでしょうね」

「…会長がこう仰っていることもあるし、今回は不問にします。以後このようなことが無いように」

慌てて姿勢を直し、呉越同舟ながら一斉に頭を下げる一同に見向きもせず、先輩は踵を返した。

が、一歩踏み出したところで足を止め、背中を向けたまま問いかけを発した。

「君の名前は？」

首だけで振り向いた切れ長の目は、その端に司波兄の姿を映している。

「1-E、司波達也です」

「君は？」

振り返ると誰もいない。

これはひよつとして俺に聞いているのだろうか？

いや、でも俺じゃなかったら恥ずかしいしな…これ答えた方がいいのん？

「その目が腐った一科生の君に聞いている。名前は？」

「ひゃ、ひゃい！1-E、1-A 比企谷八幡です」

あーこれは俺ですわー。

『目の腐り方に定評のある比企谷』が定着しそうな勢いだ。

まあ、もう諦めたからいい。

ぼつちの特性として『自分の名前を呼ばれることに敏感』というのがある。

普段、名前を呼ばれることが少ない分、たまに呼ばれた時や名前を訪ねられた時なんかには超反応を示してしまうのだ。

ソースは俺。驚きのあまり『ひゃ、ひゃうい！』とかとんでもないリアクションをしちゃうよな。

「…司波達也に比企谷八幡か、覚えておこう」

「…結構です」

「…何か言ったか？」

先輩がシャーッと蛇のような目でこつちを睨んだ。

怖っ！何コンダだよ…。思わず『すすすすびばせんでした！』とか謝っちゃうところだったよ。

「…何でも無いです」

俺の言葉に満足したのか、そのまま先輩は七草会長の後を追う。

そんな後ろ姿を目で追いながら、大きなため息がこぼれ出ていた。



## 無銘6

『入学生用校内アンケート』

魔法科第一高校 1年A組比企谷八幡

### 4 将来希望する進路の調査

一、希望する職業：専業主夫

二、その理由を以下に記せ。

古人曰く、働いたら負けである。

これは魔法文明が発達する以前から脈々と語られており、今現在もなおこの尊い教えは引き続いている。

これは何故か、この教えを紐解くにはこの教えが示すことは何なのかを理論的に考える必要がある。

初めに、労働とは何だろうか。

労働とはリスクを払い、リターンを得る行為である。

畢竟、より少ないリスクで最大限のリターンをあることが労働の最大の目的であるといえる。

小さい女の子、つまり幼女が『将来の夢はお嫁さん』と言い出すのは可愛さのせいではなく、むしろ生物学的な本能に則っていると言えるだろう。

現在は男女共同参加社会とやらのおかげもあって、既に女性の社会進出は当然のこととされている。

しかし、女性が職場に多く出たら、そのぶん男性が職にあぶれるのは自明の理。

そもそも古今東西、仕事の数なんて限られている。

例えば、とある会社の50年前の労働人口が100人で男性率が100%だったとしよう。

そこへ、50人の女性の雇用を義務付けられたら当然もといいた男性50人はどこかへ行かなければならない。

ごくごく単純な計算でもこれだけ。

さらに加えてこの学校の1番人気職は魔法科学校ということもあり魔法技能師だ。

ただでさえ就職するのが難しい魔法技能師なんて言えばさらに男性労働者の受け皿がガクツと減るのは当たり前なのだ。

魔法技能師以外にも会社というもの自体が以前よりも人を必要としなくなったこともあり、パソコンやネットの発達で効率が凶られ、1人あたりの生産能力も飛躍的に向上した。

むしろ、会社からしたら『そんなに働く気満々でも困るんですけど』という状態。

ワークシェアリングとかまあそんな感じの概念だ。

それに家電類の目覚ましい発達を遂げたことで、誰がやっても一定のクオリティが出せるようになった。

つまりとてころ男でも家事をこなせるようになったのだ。

従って、私の将来希望する職業は専業主夫を希望する。

・  
・  
・

第1高校生が利用する駅の名前は『第1高校前』である。

駅から学校までは多少入り組んだ道はあれど、ほぼ一本道で途中で同じ電車に乗り合うということは無くとも、駅から学校までの通学路で知っている学生と一緒にいるということはあるようだ。

そんな事を避けるために俺はちよつと遅めの時間に家をでる。

自宅最寄り駅からキャビネットに乗り込み、昨日同じく第1高校前を目指す。

ちよつと出発直前のキャビネットに慌てて乗り込み、扉が閉じたところであつと息を吐く。

間に合つてよかった。と安堵して顔をあげる。

携帯端末を開き、自身が愛用しているwebサイトのページを開くと、『ラブ活』だの『激モチ』だのやたらムカつく単語が羅列された広告が全面に表示され、この広告の頭の悪さが咲き乱れていて、

うえーつと、朝から気分が重くなっていた。

おい、マジかよ日本大丈夫かよ。

この広告、偏差値変換で25くらいにしか見えねえぞ。

この広告は、なんでも『ヘブンティーン』とかいう雑誌の宣伝らしく、ウチの小町もよく読んでほうんうんと頷いたりしちやったりしている。：どこに共感してんだアイツ。

俺や司波兄が読まないのは勿論、司波妹ですら読んでいるのを見たことがないが、小町曰く、女子中学生の間では今1番熱いファッション誌で皆読んでるところか読んでなかったらイジメられるレベルなんだとか。

閉じようと×アイコンをクリックするも誤タップしてしまい、イライラのみが積もっていく。

なんなの、この最近の誤タップで開く無駄広告：こんな逆に購入意欲減るんじゃないの？

結局、駅までの数十分間を無駄に過ごしてしまった。

第一高校前駅のホームに降り立つと、人混みの中にちらほら見える第一高校の制服を着た生徒たち。

どうやら皆様お誘い合わせのうえ、ここまで来たらしい。

ふっ：一人で東京（一高）に來れないなんてまるで田舎者かお子様だな。

おいおい、俺を見習えよ。東京に一人で来ちゃったぜ？

このまま東京で夢を追ったりビックになったりしちやうんじゃないの？

ホームより少し出ている人も人はうじやうじやいる。

早くも千葉が懐かしい。

家に帰りたい。

わんさかいる人波に流され、学校を目指す。

あんまり人波に流されるものだから変わっていく私をときどき遠くで叱られちやうのかと思うレベル。

一高前ホームにはうちの学校の連中が結構な数いて、ただでさえ多いこの時間はなおさら騒々しかった。

こういう駅でも一人の八幡、英語で言うとはっちぼっちステーショ  
ン状態である。

「…おはよう☒☒八幡、」

「お、おはようございませう、八幡 くん」

学生集団の中から俺の名前を呼ぶ声がする。

俺を八幡と呼ぶ同級生は殆どいない。

なんなら、比企谷と呼べる人間すらほぼ皆無。

朝の気だるげな空気を纏って振り返ると、そこにはクラスメイトた  
る光井ほのかと北山雫の姿。

「お、おう…名前呼び…いや、まあいいけど。

それで？何か用か？」

「…えつと、その…昨日は庇ってくれて、ありがとうございます。大  
事にならなかつたのは達也さんと八幡くんのおかげです」

パコリと頭を下げる光井。 あー…まだあのこと言ってるのか。

これはもう礼儀正しいというより思い込みが激しいタイプなのか  
もしれない。

「まあ、その、なんだ…別に気にすることはないぞ？そもそもあの森山  
だか森下だかと2科生との争いを止めたのは司波兄だし、俺が出なく  
とも丸く収まっただろうしな」

…むしろ、アイツの隠れ蓑にされただけみたいなどころあるしな…  
やっぱり嫌な奴だわ、アレ。

「…で、でも…」

そう言うとき光井はしゅんと肩を落とす。

言ったこちらの方が悪いような気がして、とりあえず会話のきつか  
けを掴もうと何の意味も持たない吐息を吐き出す。

どうしたもんかと辺りを見渡していると、北山は大きくため息をつ  
いた。

「…ほのかもこう言っていることだし、八幡も素直に感謝を受け取っ  
ておく、これで今回のことは終わり、でいいよね？」

「あ、ああ…」

北山に冷静に諭されてしまい、思わず生返事をしてしまった。

出鼻を挫かれたおかげで、ろくに言葉を発することが出来ずにいると、それ以上に会話が発展することもなく、なんとなく気まずい雰囲気が出来てしまった。

すると、向こうも何か言わなければと思ったのだろうか、ちよつと困つたように口元をもにもによと動かしてから光井は小さく声を出した。

「…それで、その…学校まで一緒に行きませんか？」

逃げられる道もなかったし、拒める道理もなかった。

前述の通り第一高校前駅は多くの学生が利用することもあり知人友人に出くわすことも珍しくはない。

俺自身、光井や北山と遭遇してしまったように、この時間は特に人口が密集し、一高生とのエンカウント率も相対的に上がってはいると思う。

が、しかし目の前の光景を目の当たりにして、いきなりこれはねえんじやねえの…と思わざるをえなかった。

「うすうす感じてはいたけど…八幡って司波さんたちとは知り合いだったりする？」

「あー、知り合いつていうか…」

「えっ！ そうだったんですか！」

三者三様である。

先程遭遇した光井、北山ペアと挨拶がてら二言三言会話しながら学校に向かっていた。

駅から少し歩くと学校までは一本道。

ここまで来ると、学生以外通行者は少なくなっていく。

今日の通学路はまだ静かな方で、この間来た時なんかはバイアスロンの部のロードレース場と化していた。

他の連中を抜き去っていくときの『いつけえ〜！ マグナム！』感は最高に気持ち良さそう。『負けるな！ ソニック！』と対抗してくる奴がいるとさらに燃える。

が、今日行き交わっているのは学生の他にはダイエットにはげむお

ば様や犬の散歩をするおじ様くらいのものだ。

3人で校門までのそれ程長くない道をのんびりと歩く。

実際、青空のもと散歩していると思えば、随分と気持ち良かった。

『学校をサボって観る、いいとも♪』は普段の5割増しで面白い法則』に近い。

…いいとも何で終わっちゃったんだろうな。時代かね。

なのに、学校が近づくと急速に憂鬱になるのは何故なんでしょうか…。

加えて前方には件の2科生軍団こと司波兄さんチームの面々が会話しながら歩いているのが見える。

普段であれば歩く速度を落としたり、道を変えたりして奴らとの歩幅感覚を揃えたりとするとところなのだが、今回は光井や北山がいることもあって妙な速度減速は出来ない。

ならば堂々と前を向いて通過して『あれ？今知り合いがいたような…？まあ、気が付かなかつたし仕方ないか』という空気を醸し出すしかない。

上手く行けばこの2人も奴らに押し付けることか出来て一石二鳥の得策である。

光井や北山を位置的に司波兄妹の方向に自然と配置し、気配を出来るだけ薄くする。

「あら？八幡じゃない？」

…そんな名前の人知らない。という引きこもつていても美少女のパンツが見たい志望のイラストレーターが言いそうなセリフをグツと飲み込んでドロつとした目で呼ばれた方向に目を向ける。

先程も言ったように俺を八幡と呼ぶ人間はほとんどいない。

なんなら、同じクラスでも存在すら気づかない奴ですらいるレベル。

そんな中、親しみの情を込めて、ファーストネームを呼び捨てにしてくるのは…。

「おはよう八幡。相変わらず眠たげね、睡眠はキチンと取らないと身

体に悪いわよ?」

「:そうね、こいつも俺のこと八幡って呼ぶのよね。」

司波妹とその集団は俺達の方へ寄ってくる。

「:お前は俺のかーちゃんかよ。それで?何か用か?」

「いえ?別に特に用は無いわよ?…:それにしても珍しいわね、貴方が誰かと一緒に登校するなんて」

俺、光井、北山を見渡して、そんなことをのたまう司波妹。

いや、まあ、一緒に登校しているっていうか、偶然遭遇してしまったというか:

光井は、憧れの司波妹に話しかけてもらってわたわたと困惑しているし、北山は北山でその光井を見守るといふ体制を維持しているようだ。

これなら俺が2人を司波が妹達に押し付けて姿を消しても文句は言われないだろう。

司波妹に生返事を返しつつ、ゆっくりと歩く速度を減速し、途中、いつもの千葉、西城、柴田:いわゆる司波兄さんチームの面々にそれはもう適当な返事をしながら集団の最後尾まで下がる。

最後尾まで来ると、後は適当なタイミングを見計らってこの集団から抜け出すだけなのだが、そんな俺の考えとは裏腹に、”奴”も後ろまで下がっていた。

「:挨拶も無し、か」

相変わらずの痩せ型なくせに、筋肉質なのかゴツイ肩幅で俺の横に立つ奴:こと司波達也はいつも通りスカした顔でそんなことをのたまった。

「:お前もしてねえだろ」

「おや?そうだったか?」

なーんてすつとぼける辺り、やっぱり俺コイツ苦手ですねー。

まあ、そんなことを公言しようものなら、前方にいる怖い魔法使いに氷漬けにされたまま拷問されかねないんですけどね。何、あいつエスデスか何かなの?

そんなこんなで、学校への道も残り僅かに差し迫った時である。

「比企谷、お前はもう会ったか？」

「…誰にだよ、主語付ける主語」

ボソツとした俺の返事を受けて、司波兄はちらっとこちらを向き、小さく考えるそぶりを取る。

「ふむ、2人はお前のことを知っているようだったし、1人は中学時代のクラスメイトだった様だが？」

2人の知人、と聞いて真っ先に出てくるのは、俺が中学の時に所属していた部活の部員2名だが、彼女らとは中学卒業後会ってはいない。

そもそも進路が分かれてしまったこともあって、会う機会自体がほとんど無いのである。

ならば、コイツは一体誰のことを言っているのだろうか？

そんなことを考えていると背後から『達也くん、比企谷くん』と客観的に見れば割と恥ずかしいに違いない呼び声と共に、軽やかに駆けて来る小柄な人影。どう考えても嫌な予感しかない。

こういう時の勘に限ってハズレた試しがないので、いや、もう本当色々アレ。

「達也くん、比企谷くん、オハヨク。深雪さんもおはようございます」

司波妹と比較しても俺と司波兄はだいぶ砕けていた。

どうもこの会長、昨日より距離感が近いと感じていたのだが、昨日少し会話しただけのほぼ初対面の俺達にここまで馴れ馴れしいのは如何なものか。

「おはようございます、会長」

司波兄に続き司波妹も一礼していたので、それに従って俺含め司波兄さんチームや光井北山達も一応礼儀正しくは挨拶を述べたが、普通に引き気味なのはやむを得ないだろう。

気後れするのが普通のシチュエーションだ。

「お一人ですか、会長？」

なんて見れば分かることをわざわざ訊ねた司波兄、言外にこのまま一緒に来るのか、という問いかけが露骨でもあった。…いいぞ、もっ



とやれ!

「うん。朝は特に待ち合わせはしないんだよ」

肯定は言外の質問に対する肯定でもある。

それにしても、本当に馴れ馴れしいなこの人。

「深雪さんと少しお話ししたいこともあるし…一緒にしても構わないかしら?」

これは司波妹に向けられた言葉。

まあ逃げるならここに便乗するしかないか。

「…それじゃあ、先行ってるから」

隣の司波兄に聞こえるか聞こえないか位の音量で呟いてその場を去ろうとすると、またもやガシツと肩を司波兄に掴まれてしまった。

ギャワー! 鬼! シスコン!! :分かったから、その一人で逃げようなんて絶対許さないみたいな目で睨むのやめてくれませんかね…。

「はい、それは構いませんが…」

「あつ、別に内緒話しをするわけじゃないから。それとも、また後にしましょうか?」

そう言つて、微笑みながら目を向けたのは肩を掴まれたままな俺。

…なんだろう、会長の表情は笑っているのに目が笑っていない。ぶっっちゃけ超怖い。

「それと、比企谷君にも少し、お話があるのだけど…」

そう言つて手元の端末に映し出すは、見覚えのある画面。

優しくおっとりとした声とは裏腹に、逃げたら分かるわね?、という妙に力強い意思の込められた、お話、だった。

七草会長の言わんとすることは大体分かる。

詳しく見ずとも大体の予想はつくのだが…。

まあ大方昨日提出した生徒会調べの校内調査用紙の件だろう。

いや、でもナーあれはナー。

しかし会長にあまりにも強烈な視線で見つめられたからだろうか、だんだん自分が悪いことをしたのではないかという気になってきて

しまう。

「告白を強要された冤罪事件の被害者の気分がちよつとわかつちやうぞ…。」

「一度咳払いをしながら、俺は会長に向き直った。」

「ここは、司法取引といこうじゃないか!!」

「…と、とりあえず、詳しい話を聞きましょうか」

「何か脅されてない!？」

「脅されてるね」

「…八幡、貴方また何か仕出かしたのね…」

光井の驚愕と北山、司波妹の呆れたような呟きが重なった。

「…いや、本当特に何かした覚えは全然…いやあまり…ちよつとは？」

そんな俺の思考とは別に、少しの間が出来る。

「このままでは話が進まない」と踏んだのか司波妹がため息を1つ吐き、口を開いた。

「…八幡のことはともかく、お話というのは生徒会のことでしょうか？」

「…し、司波妹!きた!女神きた!これで勝つる!」

「思わぬところからの助け船、これに乗らない手はない。」

「司波妹が一身に話の流れを引き寄せてくれたので俺への言及は免れた。」

「…比企谷君、貴方へのお話はまだ残ってますからね…深雪さん、一度ごゆっくり説明したいと思つて。お昼はどうするご予定かしら?」

「食堂でいただくことになると思ひます」

「達也くんと一緒に?」

「いえ、兄はクラスも違いますし…」

「…俺への言及は忘れてくれても全然構わないんですけどね、むしろ忘却の彼方に追いやってほしいレベル。」

「しかしまあ、昨日の帰りを鑑みるに、やはり昨日の昼も1科と2科の間でモメ事があったと見える。」

「やや俯き加減で答えた司波妹に、何やら訳知り顔で七草会長は何度

も頷く。

「変なことを気にする生徒が多いですものね…」

チラツと横を見ると、柴田がウンウンと頷いていた。昨日の一件を結構引きずっているようだ。

「じゃあ、生徒会室でお昼をぐい一緒にしない？生徒会室なら達也君が一緒でも問題ありませんし…何だったら、皆さんで来て頂いてもいいんですよ。生徒会の活動を知って頂くのも、役員の務めですから」

「せっかくですけど、あたし達はぐい遠慮します」

遠慮した、にしては、やけにきつぱりとした返答、拒絶。

千葉の示した意外な態度に、気まずい空気が流れる。

だが、彼女の真意がわからない以上、それをひっくり返すことも、フオローを入れることも出来ない。

「そうですか」

ただ一人、会長の笑顔は変わらない。

鈍い、というより、自分たちの知らない事情を弁えている。そんな感じだ。

「じゃあ、深雪さん達だけでも」

どうしましょう、と司波妹が兄に問い掛けている。

普通、今まで通りの司波兄ならば、こう言ったことは全て断っているはずだ。

だが、今回は千葉の取った態度を含め、角を立てずに断ることは相当難しい。ならば

「…分かりました。お邪魔させていただきます」

数秒の間が置かれ、渋々といった感じに司波兄は同意する。

「そうですか。よかった。じゃあ、詳しい話はその時に…比企谷君も…勿論、来ていただけますね？」

何故か俺も当然の如く参加メンバーに加わっていた。

いや、七草会長の言いたいことは分かる。

俺への罰以前に司波兄妹と交流があり、かつ彼らの引き留め役に使えそうな人材というのであれば俺をダシに使うのはむしろ得策とも言えるかもしれない。

ただ一つ問題があるとすれば、俺はそれに協力する気がないということだ。

何が嫌って、俺は自分のプライベートタイムを奪われるのが一番嫌なのである。

体育祭の後の打ち上げとか断るレベル。

さ、誘われないからじゃないぞ！時間というのは有限のリソースであり、それを誰かのために割くというのはなかなかの苦痛なのだ。

「あー…」

なんと言って断ろうか。そう思っているうちに話はあれよあれよと進んで行く。

七草会長は何がそんなに楽しいのか、くるりと背を向け、スキップでもしそうな足取りで歩いていく。

早く言わなければ決定事項になってしまう！はつきりと断ろう、そう思ったところを遮られた。

「はい、では兄と私、そして八幡の3人でお昼にお邪魔させて頂きませう」

「はい、お待ちしておりますね」

司波妹はそれはそれにはっこりと女神の微笑みのような表情を浮かべてそう返答した。

：何この悪魔。女神転生かよ。

俺は司波妹にトドメを刺され、会長は軽やかな足取りで立ち去る。

同じ校舎へと向かったというのに、見送った側の足取りは重い。

たまたま隣にいた司波兄と顔を見合わせると、どちらともなしに重たいため息が漏れでていた。

## 無銘7

そして早くも昼休みである。

授業を終えて教室から出た俺らを待ち構えていたのは司波兄妹であつた。

司波妹のニコニコした笑みと、腕を組み、仁王立ちをしている司波兄はさながら死刑執行人のようである。もうなんか軍服着て鞭持たせたら似合いすぎるんじゃないかと思う。

まあ、学校なんて監獄みたいなもんだからこの想像にさして飛躍はないだろう。アルカトラズとかイフ城とかそんな感じだ。早く救世主が来てくれればいいのに。

「さあ、八幡。行きましようか」

そう言われて自分の血の気がさあつと引くのがわかつた。やべえ、連行される。

何が楽しみなのかは知らないがウキウキと俺を連行して生徒会室に行こうとしている司波妹を尻目にチラリと兄を見る

(…諦めろ)

鬼！悪魔！！シスコン！！司波達也！！

無惨にも目を瞑り首を横に振る司波兄に人のココロはわからない。

むしろこの兄妹は兄妹になつたという事実の選定からやり直した方がいいレベル。

だが、司波兄は俺のそんな心中を勘酌するわけもなく、無表情ながらに口を開いた。

「行くぞ」

ふええ…ここには救いが無いよう。

・

足が重かつた。

たかが2階分の階段を上がつたくらいで疲れる程貧弱ではないの

だが、前に足を出したくないという意味では同じことだ。

4階の廊下、突き当たりが目的地。

見た目は他の教師と同じ、合板の引き戸。

違いは中央に埋め込まれた木彫りのプレートと、壁のインターホン、そして巧妙にカモフラージュされているであろう数々のセキュリティ機器。

プレートには『生徒会室』と刻まれていた。

司波妹がインターホンを押しノックをすると、明るい歓迎が返された。

…行きたくねえ、かと言ってここまで来て逃げるのも癪にさわる。

要は俺は単なるこの2人のダシなのだ。もうねスーパーに並ぶワカメや昆布に比企谷が追加されるレベル。大人しく三步後ろで黙ってしよう。

引き戸の取つてに司波兄が指を掛け、妹を庇う様に体を傾けながら戸を開く。

「…お前…」

「何か？」

俺の態度が勘に触ったのか、司波妹が静かに怒気を放つ。

すげえ睨まれた！いや、表情は笑ってるのに怒気放つとか…

というか、ブラコンとかマジでキモいです。肉親にベタ甘とか引くわー。ないわー。

ニコニコと威嚇してくる司波妹を司波兄が押し留めてくれている間に、俺はガラツと戸を開く。

「いらっしやい。遠慮しないで入って」

正面、奥の机から声が掛けられた。

何がそんなに楽しいんだろうと聞いてみたくなる笑顔で、七草会長が手招きをしている。

司波兄妹を先に通した後とりあえず、気持ち会釈をして彼らの後ろについた。

…しっかし、いつにも増して司波妹の洗練された礼儀作法は完璧に

決まっている。

なんなら会長ですら『えーつと…ご丁寧にどうも』とかたじろいでるし。

他にも2人の役員がいたが、すっかり司波妹のかもしれないし出す雰囲気にも飲まれている。

…こいつ、何で会長達を威嚇してんの？最近のキレやすい若者なの？盗んだバイクで走りだすの？

「どうぞ掛けて。お話は、お食事をしながらにしましょう」

司波妹の先制攻撃にペースを崩されたのか、七草会長の打ち解けた口調が影を潜めた。

指し示されたのは多分、会議用の長机。

今時、情報端末が埋め込みになっていないのは、飲食用途を見越してのことなのか。

なんにせよ、学校の備品としては珍しい木製の机を前に、司波兄妹は席に着く。

しかしまあ、珍しいな…普段こういう場合大抵無理にでも司波妹は兄を上座に座らせようとしていたのだが、今回は流石に司波妹の方がメインという自覚でもあるのだろうか、司波妹が我慢して上座に座っている。

さて、俺はどこの端っこに座ろうかしら…。

四隅のうちどこかを守ってるとか俺マジ四聖獣の1人、と思っていると強い視線を感じた。

視線の方向を振り向くと、司波妹が司波兄の隣と俺を交互に見つめながら司波兄の隣に着席するよう視線で促している。

「え、いや、俺は端がいいんだけど…」

そう言っても司波妹が目線を外すことはない。

チラチラと催促してその視線から逃れようと試みたが、司波妹は相変わらず俺を見つめたままだ。

何、この子…愛しいお兄様を上座に座らせられなくて不機嫌なのは分かったけど俺に当たられても困るんですけど…。

「…比企谷、諦めろ」

さらに司波兄のトドメである。

「…分かった、分かったからその目やめろ」

まあ、どこに座つても発言なんかしないんだから同じだ。なら、ここは司波妹に逆わない方がよからう。

渋々ながら折れた俺は司波兄の隣に腰をかけた。

「お肉とお魚と精進料理、どれがいいですか？」

メニューが複数あるとおもしき自配機に加えエナジードリンクが各種揃えられている自販機…こいつはヤベエ…ブラツクの匂いしかない。

司波兄妹が精進料理を選び、俺もそれに追従した。

後は待つだけだ。

ホスト席に七草会長、そのとなりに三年の女子生徒、そして俺と司波兄妹の前に風紀委員長と、確か入学式の時に辛うじてで覚えた中条あずさとかいう女子が席に着くと、多少調子を取り戻した七草会長から順々に各メンバーの自己紹介がされた。

丁度、書記の中条先輩という先輩の紹介を終えた後、ダイニングサーバーからの準備完了の知らせが表示され、無個性ながら正確に盛り付けられた料理がトレーに乗って出てきた。

合計6つ。

1つ足りない…と思つていたら、風紀委員長たる渡辺摩利先輩がおもむろに弁当箱を取り出した。

…あらやだ！意外!!家庭的!!

普段ツンケンしてそうな女子がふとしたところで見せる家庭的ポイントにはグツときますね…これがギャップ萌えなのかしら。

「何だ比企谷、私の弁当に何か…ああ、意外だったか？」

「…あ、いえ、別に」

口元をニヤつかせながらからかわれているのは分かるのだが、悲しいかなこういう経験が少ないからかどもった返事になってしまう。

だってほら、七草会長なんてこつちを見ながらニマニマしてる辺りもう本当アレ。



「私たちも明日からお弁当に致しましょうか」

司波妹の一言で視線が外れる。

「深雪の弁当はとても魅力的だが、食べる場所がな」

「あつ、そうですね…まずそれを探さなければ…」

…うわあ、ほんとなんなのこの2人。

ちよつとアブナイ人なんじゃないの？関わらんとこ…。

「…まるで恋人同士の会話ですね」

会計の市原鈴音先輩の発言に司波兄が続ける。

「そうですね？血の繋がりが無ければ恋人にしたい、と考えたらことはありますが」

ギブ、

さっきのやりとりだけでラーメン無限大どころか次郎三杯完食くらいの重さだったのに、さらにバターギタギタ野菜マシマシ化調マシくらいの重量だわ、これ。

「…もちろん、冗談ですよ？」

「……………お前が言うど冗談に聞こえねえよ」

小声でつぶやく俺を、司波兄は『余計なことは言うな』という目で睨みつけてくる。だから、目が怖えつつの。

閑話休題。

司波兄妹の小粋なジョークタイムも終わり、昼食も大方が片付き終えた。そろそろ本題に入りたい。

俺は会長や司波兄妹達と仲良く昼食を取りに来た訳ではないのだ。

「そろそろ本題に入りましょうか」

高校の昼休みなんてそう多くある訳でもないし、いい頃合いだろう。

俺も何故呼ばれたのか聞いておかないといけない。

フォーマルな口調に直した会長の言葉に、司波兄妹にそろって頷いた。

「当校の生徒会は伝統的に、生徒会長に権限が集められています。一極集中型と言ってもいいかもしれません」

会長の口調は説明調ではありながらどこか諭すように続ける。

「生徒会長は選挙で選ばれますが、他の役員は生徒会長が選任します。解任も生徒会長の一存に委ねられています。各委員会の委員長も一部を除いて会長に任命権があります」

「私が務める風紀委員長はその例外の1つだ。生徒会、生徒会部活連、教職員会の三者が三名ずつ選任する風紀委員で選ばれる」

「と、いう訳で、摩利はある意味で私と同格の権限を持っているんですね。」

さて、この仕組み上、生徒には任期が定められていますが、他の役員には任期の定めがありません。生徒会長の任期は10月1日から翌年9月30日まで。その期間中、生徒会ら役員を自由に任免出来ません」

…なんとなく話が見えてきた。要するにこれは司波妹の生徒会への勧誘だ。

司波兄妹もそこは理解しているらしく再度、頷いた。

「これは毎年の恒例なのですが、新入生総代を務めた一年生は生徒会役員になってもらっています。趣旨としては後継者育成ですね。そうして役員になった一年生が全員生徒会長に選ばれる、という訳ではありませんが、ここ5年間はこのパターンが続いています」

「会長も首席入学だったんですね？流石です」

「あ、まあ、そうです」

目を泳がせ、僅かに頬を染め、歯切れ悪く会長がドモる。

司波兄のお世辞程度で照れるような人物には見えないが、もし、これを演技でやっているのならば相当の役者レベルである。

「ゴホン…よって深雪さん、そして比企谷くん。私は貴方達が生徒会に入ってくださいることを希望します」

…時間が止まった。いや、勿論比喻だが、頭の理解が追い付ついていない。

ワンクールのアニメで例えるなら3話くらい飛んで見るレベル。

「…はっ、いやいや、ちよつと待って下さい」

俺の必死な訴えかけに七草会長はキョトンとした顔になる。

いや、そんな『戦争反対。核武装を放棄せよ』くらい当然のことを言ったわよ、私？みたいな顔されても。

「…深雪はともかく比企谷まで生徒会に入れるのは何かお考えがあったのことでですか、会長」

流石の司波兄もこの会長の発言には幾らか驚いたのか、興味深そうに口を開く。

すると会長は自身の携帯端末とおぼしき媒体から1つのページを取り出した。

「これは以前私達生徒会が学校側に頼まれて行った入学生用の校内アンケートの中で、ある男子生徒の解答例です。…読みましようか？」

会長はちらりとこちらを見る。

それを首だけで丁寧に遠慮すると、会長は周りにも見えるように中央に表示した。

ここまですればもうこのページが何か分からんではない。これは間違いなく俺が書いたアレだろう。

しかしこうして会長から提示された文章を読んでいると、自分の文章力がまだまだだということに気づかされる。小難しい単語を並べれば頭がよさそうに見えるんじゃないかという、どこぞの売れない作家が考えそうなこすつからい思考が見透かされてる気分だ。

さては、この未熟さが原因で生徒会に呼び出されたのか。

勿論違うよね。知ってました。

会長はいちいち芝居がかった風に頭に手を当てながら言葉が続ける。

「この回答を頂き、正直なところ私は驚き、そして考えさせられました。当校にこんな考えを持っている生徒がいるなんて、とか、彼はどのようなにすればこの女性に負担を背負わせて当然みたいなヒモ感覚から更正してくれるのだろうか、とか！」

ひどい仰りよう。

「いや、それだとただのヒモじゃないですか…俺はヒモじゃなくて専

業主夫になりたいんですけど…」

「…違いがわからないわよ」

俺の作文を読み先程から頭を抱えていた司波妹が小さく呟いたが、俺も違いがよくわからない。でもまあ、ヒモより専業主夫の方が聞こえがいいじゃないか。というか働きたくない。

すると渡辺先輩が会長の言葉に追従するように口を開く。

「一度はこちら（風紀委員）で更正を引き受けることも考えたが、生憎選任枠の目星いい人材は既に埋まってしまっているからな、生徒会推薦枠はまだだが、それはそれ、考えあぐねた結果、一つ君の興味深い部活歴に目がついた」

あぶねー、俺このままだと風紀委員に肅清されていたのか…本当、誰かは知らんが枠を埋めて

くれた人に感謝感激雨霰である。

ん??部活…歴?

俺の苦虫を踏み潰した表情とは別に、司波兄は『ああ、なるほど』と小さく呟くと頷きながら言葉を繋ぐ。

「つまり、..奉仕部..のようなことをこの学校でも始まるのですね」

「まあ!!」

「なっ?!?!」

司波妹と俺の驚嘆と悲鳴が重なった。もちろん後者が俺。

奉仕部。

それは俺が中学時代に入部させられていたワケのわからない部活で、持つ者が持たざる者に慈愛の心を持ってこれを与える、確か、奉仕部部长曰く、..飢えた者には与えるのではなく、魚の取り方を教える、のだからなんとかか。

まあ、ようするにボランティアをする部活だ。生徒の願いを聞き、その手助けをする部活、それが奉仕部である。

アレを…またやる…だと…!

「ほう、随分と珍しい部活に入っていたようですね奉仕、ですか」

「奉仕って言われてもすぐパツとは思いつきませんよね、一体どんなことをする部活なんですか?」

俺が驚愕に打ちひしがれていると、会計の市原先輩と書記の中条先輩が質問する。

すると、それに答えるように司波兄が続けた。

「奉仕部とは生徒が抱える問題の解決を仕事として、依頼されたものに対して部員が解決する、ボランティアと便利屋が兼用されたような部活です」

「お前が言うのおかしいでしょう？ いやまあ、だいたい合ってたんだけど」

司波兄の説明に渡辺先輩が口を挟む。

「ほう、君は随分と詳しいんだな」

「ええ、俺も深雪も何度か利用していましたから」

「何度か…ね、この兄妹の奉仕部利用率は比較的少ないにしても、持つてくる問題の案件はどれもヘビー級に重く、よく悩まされたものだ。」

淡々と司波兄が言い終え、渡辺先輩達を納得させると会長は先程の演技地味た口調はなりを潜め、真剣に話を続けた。

「…残念ながら、今、当校において一科生と二科生の間に溝が出来ていることは新入生の3人ももう理解されているかもしれませんが…そこで少しでもその溝が埋まるように、この奉仕部を通して互いの悩みを解決していつて欲しいと考えています」

会長はチラリと司波妹を見る。

司波妹は手元に目を落とし、何か思い詰めた瞳をしていた。

…なんだろう、この先程からの司波妹らしからぬ感じは、何かを言いたそうではあるが、言わずに黙っている。

会長は再びこちらに視線を戻した。

「と、言う訳で比企谷くんには生徒会の直属でこの奉仕部に入ってもらい、問題解決のための手助けをして欲しいのです」

「手助けって…そんな大きな問題の解決なんて出来るんですかね？」

「それは…今後の努力によるところが大きいでしょうね」

「…それって解決方法ですか？」

俺が思う限りでは努力というのは最低の解決方法だ。

もう頑張るしかない、その他のどんな要素も入りえない、それは逆に言えばもはや為す術なしという意味でしかない。

はつきり言って無策と変わらないのだ。いつそ見込みがないから諦めろと放置したほうがよっぽど楽だ。無駄な努力ほど虚しいものはない。だったらその問題は諦めて、その分の時間を他のことに注いだ方が効率がいい。

「努力は立派な解決方法ですよ。何事もやる前から諦めていては何も成し遂げられません」

会長が俺の考えを読みとったように言う。この人工スパーかよ。

こちらからの反論が特に無いと分かると、会長は向き直り改めて告げた。

「それでは2人とも、改めて聞きます。引き受けて頂けますか？」

会長の問いに答えはノーと告げたいのは山々なんだが、やらないと言ったところで、どうやっても逃げられる気がしない。

くっ…このままだとまたこんなところで変な時間を使ってしまうことに…。

俺がそれでもなんとか逃がられないか逃げ道を模索していると、おもむろに司波妹が口を開いた。

「会長は、兄の入試の成績をご存知ですか？」

「ええ、知ってますよ。凄いですよねえ…正直に言いますと、先生にこっそり答案を見せてもらったときは、自信を無くしました」

…ちよつと、この学校、個人情報管理とか大丈夫なの？ガバガバ過ぎない？ベ●ツセでももう少し管理体制ちゃんとしてるぞ。

「…成績優秀者、有能な人材を生徒会に迎え入れるのなら、私よりも兄の方が相応しいと思います」

「おいつ、み」

「デスクワークならば、実技の成績は関係ないと思います。むしろ、知識や判断力の方が重要なはずですよ」

ふむ、なんとなくコイツが言いたいことが見えてきた。…だが、少

し意外だ。俺が知る限りお兄様大好きブラコン少女なコイツがそのお兄様の言葉を遮ってまで自分の主張を通したところを少なくとも俺は見たことが無かった。

「私を生徒会に加えていただけるといってお話については、とても光栄に思います。喜んで末席に加わらせていただきたいと存じますが、兄も一緒にというわけには参りませんかでしょうか」

当の司波兄は顔を覆い天を仰いでいる。

分かるわーその気持ち、むしろ俺と変わって欲しいまである…ん？  
変わる??

そうか！生徒会枠を変ればいいのか!!そうすれば司波妹も愛しのお兄様と生徒会に入れてハッピー、俺も余計な仕事をしなくてハッピーラッキーポピパピポパーとwin winの関係じゃないか!!

「残念ながら、それはできません」

え？ダメなの？

その回答は会長ではなく、隣の人物が答えた。

「生徒会の役員は一科の生徒から選ばれます。これは不文律ではなく、規則です。この規則は生徒会長に与えられた任免権に課せられる唯一の制限事項として、生徒会の制度が現在のものとなった時に定められたものなので、これを覆すのは事実上不可能です」

淡々と、どちらかと言えばすまなそうに、市原先輩は答えた。

どうやら彼女も一科と二科の差別意識にはネガティブな考え方を持っているのだろう。

「…申し訳ありませんでした。分を弁えぬ差し出口、お許しください」  
い。  
…あの司波深雪が謝罪している。割と珍しいどころか本当に珍しい。

これも市原先輩が二科生に対する理解があったからこそ、すんなり司波妹も謝罪出来たのだろうが、アレ、一度自分が正しいと思ったら死んでも頭下げないタイプだぞ…主に俺に対しては特に。

「ええと、それでは深雪さんは書記として、比企谷くんは…特別生徒会

役員として、今期の生徒会に加わっていただくということでもよろしいですね？」

「…なんすか、特別生徒会役員て」

なんだかまたワケの分からない役職に就かされそうだったので釘を打っておく。

本当なんだよ特別生徒会役員て…英語で言えばSpecial役員、なんか優れてるっぽく感じるが…(全く英語で言う意味はない)

「特別生徒会役員は今期から導入される役員制度の1つなだけで…活動内容は深雪さんと同じく後程説明するわね！」

会長は舌をチロツと出しながら満面の笑顔でそんなことをのたまわれた。

おおう…なんなの、なんか俺や司波兄と司波妹の対応に差を感じる気がするんだけど…これが世に言う男女格差なのかしら…

そんな本当にどうでもいいことを俺が考えている間に話は進む。

「深雪さん、もし差し支えなければ今日の放課後から来ていただいてもいいですか？」

俺の意識がまるっと抜かれていた。こんな横暴許されていいはずがない！…ここは断固として俺の意思を示す時である。

「あの…」

「比企谷くんも今日放課後に予定とか…ある？」

疑問形だった。というか会長、その言い方だと俺に予定なんてものがあるのかと言われているようなんですが…日本語って不思議!!

「わかりました。放課後は、こちらに伺いましたらよろしいでしょうか?…八幡もいいわね?」

「…はい」

司波妹に促され領いてしまった。おい!俺の意思!!全然示されてねえ!!

などと、俺が諦めムードに突入している最中、渡辺先輩が唐突に口を開く。

「…昼休みが終わるまで、もう少しあるな。ちょっといいか?風紀委



員会の生徒会選任枠のうち、前年度卒業生枠がまだ埋まっていない」

「それは今、人選中だと言っているじゃない。まだ新年度が始まって一週間も経っていないでしょう？ 摩利、そんなに急かさないで」

七草会長が唐突に話し始めた渡辺先輩に注意するも渡辺先輩は続ける。

「確か、生徒会役員の選任規定は、生徒会長を除き一科生を任命しなければならぬ、だったよな？」

「そうよ？」

ニンマリとした意地の悪い笑顔で見つめるは…ああ、なるほど、生徒会ではダメでも風紀委員ではあれば二科生を採用してもいいわけか。

そんな中俺が気づいたことを察すると渡辺先輩は続ける。

「おや、察しがいいな比企谷。その通り、私達風紀委員は司波達也くんを生徒会枠で指名したいと考えている」

「摩利、貴女…ナイスよ！」

「はあ？」

七草会長の歓声いつもの司波兄らしからぬ間の抜けた返事。

ん…さてよ？ さっき渡辺先輩は目星い風紀委員枠は埋まってしまったから俺を風紀委員で扱うことはやめた、と言っていた。ということは、もし、奴が二科生じゃなければ今頃呼ばれたのは…やめよう、これ以上考えていたら恐怖で震えそうだ。ありがとう司波兄。お前の犠牲は30分くらいは忘れない。

「そうよ、風紀委員なら問題ないじゃない。摩利、生徒会は司波達也くんを風紀委員に指名します」

いきなり過ぎる展開に流石の司波兄も動転している。

いいぞ、もつとやれ（手のひらクルー）

「ちよつと待って下さい!!俺の意思はどうなるんですか？ 大体風紀委員が何をする委員会なのかも説明を受けていませんよ」

司波兄は無謀な抗議に身を乗り出しているが、当の会長や渡辺先輩はどこ吹く風。取り扱われていない。

「妹さんや比企谷君にも生徒会の仕事について、まだ具体的な説明はしておりませんか？」

「…いや、それはそうですが…」

「というかもう市原先輩にすら司波兄の抗議は跳ねられているし…もう一周して見ていて哀れなレベル。」

「だが、まあ、助ける義理も手段も無いし、ここは見物を決め込むことにしよう。」

「まあまあ、リンちゃん、いいじゃない。達也くん、風紀委員の仕事は魔法使用に関する校則違反者の摘発と、魔法を使用した争乱行為の取り締まりです。いわば、警察と検察を兼ねた組織ね」

「すごいじゃないですか、お兄様」

「…まあ、お前向きの役職なんじゃねえの、知らんけど」

「いや、深雪…そんな『決まりですね』みたいな目をするのはちよつと待ってくれ…それに比企谷、お前今の説明を聞いていたのか？風紀委員は魔法が使用された場合、それを力づくで止めなければならぬ仕事なんだぞ？俺は実技の成績が悪かったから二科生なのにそんな仕事こなせる訳ないだろう」

「いや…聞いていたからこそお前向きだと思ったのだが…」

「そんな司波兄の主張は渡辺先輩にあっさり返されてしまう。」

「構わんよ」

「何がですつ？」

「力比べなら私がいる…つと、そろそろ昼休みが終わるな。放課後に続きを話したいんだが、構わないか？」

「確かに時計を見ると、そろそろ昼休みが終わりそうな時間である。」

「司波兄はこの世の理不尽に苛まれながら悔しそうに頷いていた。」

「うんうん、分かる分かる、本当この世の中って理不尽。」

「俺もこの理不尽に対し、明日から頑張る、」をスローガンに掲げて抗っている。

「明日から頑張る。いい言葉だ。毎日でも言いたいくらいに素敵な」

言葉だよな!!

…それにしても司波兄の横でガッツポーズとか司波深雪さん、愛し  
のお兄様がほぼ100%風紀委員着任にすげえ嬉しそうじゃねえか  
…いや、まあいいことなんだけどね。

## 無銘8

別に、待つのは得意だからいいのだ。

そもそも使っているCADがライフル型というのもあり、どこかのポイントにそつと潜み、標的がやってくるまでじつと待つ、というのも取り立てて苦手ではない。

俺は常に気長に待つように心がけている。

それは比企谷家<sup>ウチ</sup>がCADの部品生産・供給を主な生業としていることも関連している。

中学時代、家業の手伝いもあつて親父よろしく社畜と化していた時も、

新企画のプレゼンをして取引先が持ち帰って検討の上、折り返しますと言っていた電話も、比企谷家の製造部署から納品先への納品完了連絡も、ずーつと待っていてられる。

まあ、諦めている、というほうがより近いかもしれない。

無沙汰は無事の便り、返事がないのは良い便り、などというが大嘘である。

往々にして、返事が遅い案件ほどロクでもない結果になることが多い。

何も問題が起きていないなら、返事はすぐに来るものだ。

取引先は新規企画のご案内に対してポジティブな反応なら

『いいですね！次の打ち合わせはいつにします？』とその場で言うし、製造部が納期通りに納品が出来る場合にはこれ見よがしに

『いやー、締め切り間に合いましたね、ガハハ！』とわざわざ報告に来る。

だから、音沙汰ないときは大体ヤバイ時か取り返しがつかない事態になつている時である。

しばらく待ってみて、こちらから連絡してみると『え？その話、まだ生きてます？』とか言い出す。

すつとぼけてくれるならまだマシンな部類で、『いや、逆に何で間に合うつと思つたんですか？』などと開き直る奴もいる。

最悪な連中だな…などと思うことなかれ。

普段は気さくない人が多かったりするのだ。

けれど、仕事や納期や締め切りや売り上げやノルマが善人を悪人に変えてしまう。

全部仕事が悪いのだ。

なんもかんも仕事か悪いのだ。

仕事さえなければ人は皆心安らかに生きていくことができるのだ。

仕事憎んで人を憎まず。

俺が家から委任（という名の労働力提供）されていたのはCADの部品開発とその営業だが、営業職は特にこの精神が必要とされていた。

いや、営業職に限らず、人と人との関係を繋ぐ窓口的な役割を果たす者には寛容さと忍耐、あるいは不感症めいた性格が必要とされる。

だから、出先で10分、20分待たされても俺は特に何とも思わない。

配属させられたばかりのころは、市内のCADメーカーを何軒も回らされ、その度似たような仕打ちを受けた。

それに比べれば15分やそこら、会長達もいない生徒会室で待たされて、ガタイのいい上級生と小粋なトークタイムに興じることくらいどうということもない。

平気の平左屁の河童である。

第三次世界大戦前にベルトコンベアが蠢く飲食店の地下でひたすら寿司を作らされていた河童さんの苦勞を思えばこの程度なんてことはない。

だが、それにも限度というものがある。

いや、先程も述べたが待たされること自体は別にいいのだ。

むしろ何時間であっても待っていられる。

ただ…。

「…ねえ、なんでこんなことになってるの？」

場所は第三演習室。

先程、生徒会室に突然現れた司波兄妹にここに来るように命じられ、ノコノコ行ってみれば、生徒会の面々がそこにそろって何やら慌ただしくしていた。

「どうやら副会長と司波兄が模擬戦をするらしい。」

「いや、らしい、という表現はあまり適切ではない。」

「正確には、した、だ。」

模擬戦前、副会長らしき人物が『君が司波さんと同じく新しい生徒会役員になる比企谷だね？丁度いい、君もここでブルームの戦い方とこのを見学していくといい』とか言っていたが

結果を見れば、司波の圧勝。

秒殺という表現があるが、この試合には5秒もかかっていないだろう。

副長!!何やってんだよ副会長!!

…どうやら希望の花は咲かなかつたらしい。

まあ、元々、奴の能力は知っていたので副会長を司波兄が倒すことに疑問はない。

サイオンを使った波の合成。

振動数が異なるサイオン波を三連続で作り出し、三つの波動がちやうど副会長と重なる位置で合成されるよう調整して、三角波のような強い波動による、人為的なサイオン酔い”。

…まあ、これも鬼畜シスコン狂戦士として（俺に）知られている司波兄ならばやりかねない。

副会長が司波妹には謝罪するも、兄には視線をぶつただけで踵を返すのも、副会長の心情を鑑みれば分かるし、その反応に目の前のブラコンがムツとする気配を飛ばすのも、いつも通りといえる。

だからここまでは俺の想定範囲内。俺の想像を超えていたのはこの後だ。

「生徒会室に戻りましょうか」

会長の一声で、その場にいた全員が移動を開始しようとしたその時である。

どうだ！と言わんばかりに満足げな司波妹が俺に近づいてきた。

…うわあ、凄く嬉しそう。

コイツがこういう嬉しそうな顔している時って大抵なんかしら面倒くさいことになるから関わりたくねえんだよなあ…ここはお世辞でも述べて即座に撤退しよう。

「…流石だな」

「当然でしょう？お兄さまの本来の実力を持ってすればこの程度のこと…曲がりなりにも、お兄様と体術で戦える私達と同世代の人物なんて貴方くらいのものでしょうか？八幡？」

突然、そんなことを前方にいる2名にも聞こえるくらいの音量でのたまいやがった。

コイツ…ワザと会長と渡辺先輩に聞こえるように話やがったな…。

狙いは分からんがマズイ…会長達が好奇の目でこちらを見ている！！このままでは俺も司波兄と戦えとか言つてきかねない！！こちらも何か反論しなくては！

「は？俺が？アレと？…お前、どう育ったらそんだけおめでたい思考になるの？毎日が誕生日だったの？それとも恋人がサンタクロースだったの？」

そうでなきや一高の五本指とまで呼ばれているらしい（先程会長がこっそり教えてくれた）

副会長が秒殺されたすぐ後、そんなことをのたまうような脳内ハッピーにはならないだろう。

このまま成長したらきつと重度のブラコン+頭ハッピーセットで痛い目を見るに違いない。

取り返しのつかないことになる前に、起動修正してやった方がいい。

…つい俺の中の人としての優しさが騒ぎ出してしまった。

俺はオブラートに包んで慎重に言葉を選ぶ。

「司波妹。お前は異常だ。勘違いもいいところだ。ロボットミー手術と

かしとけ」

「…お兄様をアレ呼ばわりしたことは、今は聞き流してあげる、けど八幡？少しは菌に衣着せた方が身のためよ？」

司波妹はウフフと微笑みながら俺の方を見るが、目が笑っていないので怖い。

なんなら足元にうつすら氷張ってるし。

や、でもカスだのクズだの言わなかったただけ褒めてもらいたい。はつきり言っただけの顔が可愛くなかったら俺は殴っている自信がある。

「ほう…キミもそこまで出来るのか、これはもう…なあ？」

「そうね摩利…丁度比企谷くんの実力も見てみたいと思っただけだよね」

じりじりと忍び寄る影。

不穏な空気を感じ、今すぐにでも逃げたいところだったが、2人の表情はにやにやと実に楽しそうに喜びに満ちていた。

そ、そうだ!!司波兄なら!!奴ならきつと無用な戦いや面倒なことは避けてくれるはず!!

アレはとんでもなく嫌なヤツではあるが、その共通認識は同じなはず!!

期待に満ちた目で司波兄の方を振り向くと、何やら思考中のご様子。

「…そうですね、会長、渡辺風紀委員長、俺に比企谷と正式な試合をさせてくれませんか」

少しの間した後、司波兄はそんなことをのたまった。ギャワー!!この鬼畜!!シスコン!!司波達也!!

しかし、司波兄がそんなことを言うとは少し意外だ。

普段なら絶対この手の面倒ごとには手を出さないヤツだと思っただけだが…一体何を企んでいるんだ？

「…ふむ、彼はこう言っているがキミはどうだ比企谷」  
「嫌です」

あまりに力強く、俺らしい回答。



我ながらタイムラグゼロでやや食い気味に即答したことに驚いてしまう。

その驚きは渡辺先輩も同様だっただろう。言葉に詰まり、口をぽけっと開いていた。

「…まあ、君ならそう言うと思っただけだが即答されるとは思わなかったぞ…」

頭痛でもするのか、こめかみの辺りにそつと手を添えて渡辺先輩は俯く。

そんな時、隣にいた七草会長がなにか閃いたようにポンと手を叩くとそのまま口を開いた。

「まあまあ摩利、確かに比企谷くんが達也君と試合をしても何のメリットも無いものね」

会長が覗き込むように俺を見るとさらに話を続ける。

「だから比企谷くんにも戦うメリットを用意してあげる。もし比企谷くんが達也君に勝ったら私が貴方のいうことをなんでも聞いてあげる、というのはどう?」

「なんでもっ!?!」

なんでも、ということはあるですね。いわゆるなんでもなわけですよね。…ごくり。

会長はそんなことを言うと、ニマニマと意地の悪い顔で耳元まで近くと妖艶に囁いた。

「ええ、なんでもです。比企谷くんは何か私に聞いて欲しいことがありますか?」

会長から漂う女の子特有の甘い香りが俺の鼻腔をくすぐる。ちよっ、近っ!?!近い近い近い匂い!!

何とかして距離を取ろうとするも会長のニマニマ顔は止まらず、気がつけば俺は会長にびったりくつつかれていたりする。

ていうか、これ当たってる!離れた!また当たった!!さつきからおっぱいがヒット・アンド・アウェイ!ヤベー!このおっぱいモハメド・アリだよ…。くそう、なんだか籠絡されかかっている気がしないではないけど、ここではないを選ばないと、それこそこの天国じしくが続きそう

…。

「……………わかりましたよ、やりますよ、試合」

ついには根負けして司波兄と戦うことになってしまった。

「…比企谷も真由美の色香にやられたか、真由美のそういうところ素直に感心するぞ…」

渡辺先輩の呆れたと言わんばかりの視線もなんのその 会長はパチンと俺に向かってウインクをするくらいの余裕があった。

「では決まりだな、20分後用意を整えてここに集合！風紀委員長として、2人の試合が校則で認められた課外活動であると認める」

「場所は第三演習室、試合は非公開とし、双方にCADの使用を認めます」

模擬戦を校則で禁じられている暴力行為…喧嘩としないための措置。

七草会長と渡辺風紀委員長が厳しい顔つきでそう宣言すると、中条先輩が自前のノートPCに何かを叩き始めた。

・  
・  
・

「はあ…やりたくねえなあ…」

生徒会長印の押された許可書(こういう物は未だに紙が使われている)と引き換えにCADのケースを受け取り肩に担ぐと、そんなに重くは無いハズのCADケースが途端に重くなったように感じる。…このまま帰ってしまおうかしら。

そんなことを考えていると目の前に見えるは司波兄妹。

ただでさえ重いこの肩がさらに重くなっていくのを感じた。

「さあ、行きましようか八幡」

そう言つて司波妹は俺の腕を取ろうとする。

それをするつと躲し、さらに司波妹がずっと手を伸ばす。さらにそれをぬるりと避ける。

「…何すんだよ」

「いえ、貴方ならこのまま逃げそうだから、しつかり捕まえておこうか

と思ったのだけど」

大した信頼関係である。

いや、まあ、こいつらとの間に信頼関係とかゼロに等しいけど…なんなら俺の場合信頼出来る奴がいなまでである、つまり、友人ゼロ。

かつこよく言う『Friend/zero』である。登場人物少ないから作画楽そう。

そんなバカなことを考えている間に、いつの

間にか背後にいた司波兄にガツシリとつかまれる。そこにぬすつと入ってきた司波妹が腕を拘束して完全に逃げ道を塞がれてしまった。

「さっ、行きましようか」

「…諦めろ、こうなった深雪は俺でも止められない」

そう言っただけを拘束する手に力を入れるこの兄妹。

ちよ、ちよ…痛っ！痛いつっの。

そんな俺の虚しい抵抗は功を成さず、俺はついに第三演習場の入り口前まで連れてこられてしまった。

先程までは帰りの生徒などで賑わっていた喧騒もここまで来ると人も少なくなるのか、シンと静まり返っている。

ああ…帰りたいなあと心の底から思っていたそんな時。

ふと、不意に司波兄は口を開いて俺に質問をしてきた。

「比企谷、お前に聞きたいことがある…以前スクラップ同然となった特化型のCADの修理を俺に依頼してきた時の話だが…」

「はあ？」

突然何を言い出すんだコイツ…確かに以前、事故によりハカナクモカナシク壊れたCADの修理をコイツに頼んだことがあった。

昨日の朝方にこいつら兄妹が渡しに来たライフル型のCADのこ

とだが、それが一体なんだってんだ。

「いや、何ということは無いのだが、どうすればあんな壊れ方をするのか少し気になってな」

「…事故だっただろうが、事故だよ事故、魔法の使い過ぎによる故

障だ、それ以上でも以下でもねえよ」

そう言っても司波兄は食い下がる。

「CAD：とくにお前が以前使っていたライフル型の特化型CADは多少強力な魔法を使ったところで、スクラップになるようなことはない。：そうだな、例えば、戦略級魔法、の連続使用、なんてことでもしないとな：」

「：ただの事故だっつってんだろ：熱膨張って知ってるか？」

そう言っつて司波兄の質問を断ち切るように第三演習室の扉を開いた。

まあ、流石に熱々の紅茶をかけたくらいで銃は曲がらないとは思いますが、多少は？ね？

所定の時間が経過し、再び俺は第三演習室で司波兄と向かい合っていた。

司波兄はタッチケースから取り出した拳銃型のCADを取り出し、弾倉の部分のカードリッジを抜き出して、別の物に交換する。

一方、俺はというと件のライフル型のCADを使用する、という訳ではない。

特にコレといって使えない理由があるわけではないが、そもそもあのCADは接近戦を主とするCADではなく、どちらかといえば遠くからの狙撃がメインとされたCADだからだ。

CADケースを開け、均一に揃えられた10本のナイフ型CADを取り出すと、ついでに小型のケースをベルトに付け、腰に巻く。

勿論、こちらも特化型のCAD。

凡庸型も使えない訳ではないが、こちらの方が使い慣れているというのがある。

そも、特化型のCADとは凡庸型のCADと比べて使用出来る起動式の数が少ない。

凡庸型のCADが99種類の起動式を格納出来るのに対して、特化型CADは9種類しか格納出来ないという欠点がある。

ただ、まあ、一試合に99種類もの起動式はいらないし、何だかんだと使い慣れているCADの方がやりやすかったりするのだ。

「よし、それではルールを説明するぞ。直接攻撃、間接攻撃を問わず相手を死に至らしめる術式は禁止。回復不能な障害を与える術式も禁止。相手の肉体を直接損壊する術式も禁止する。ただし、捻挫以上の負傷を与えない直接攻撃は許可する。武器の使用は禁止。素手による攻撃は許可する。蹴り技を使いたければ今ここで靴を脱いで学校指定のソフトシューズに履き替えること。勝敗は一方が負けを認めるか、審判が続行不能と判断した場合に決する。

双方開始まで下がり、合図があるまでCADを起動しないこと。このルールに従わない場合は、その時点で負けとする。あたしが力づくで止めさせるから覚悟しておけ」

俺と司波兄、双方が頷き、五メートル離れた開始線で向かい合い渡辺先輩のルール説明に同意する。

まあ、勝負なんて適当にやって負けちゃいましたーてへへっ★でいいんだけどな。

参加することに意義があるって便利で素敵な言葉だなあ。

「ただし、比企谷に限りワザと負けようとするような素振りを見せた場合、強制風紀委員雑用係を命じることにする。以上だ」

「横暴すぎる…」

この人ただの暴君だ!!風紀とは一体…。

「ふふん、君の雑務能力は入学式の時からよく知っている。もしもワザと負けようとするなら…楽しみだな、比企谷」

とても風紀を取り締まる側の人間とは思えないほどに威勢良く、むしろ普段より元気なんじゃねえかってくらい渡辺先輩は嬉々としてそう言った。

嬉々としてと乳としては五感が似てるなあ…なんて現実から目を背けてしまう。

しかし人に罰を与えるのが嬉しいとかどんな性格だよ。

俺はCADを握る力を強め、司波兄は右手を床に向けCADを構えている。

場が静まり返り、渡辺先輩の合図を待つ。

静寂が完全に支配した、その瞬間。

「始め！」

俺と司波兄の”正式な試合、その火蓋が切って落とされた。

司波兄の姿が消える。

いや、消えたのではない。目に見えない速度で司波兄の攻撃の間合  
いまで詰められたのだ。

「時空間制御!!」

当惑より先に手にしたCADに背骨髄反射的に起動式を起こす。

間一髪、飛び退いた俺の鼻先を、司波兄の拳が掠め過ぎる。

つたく…この化け物め…奴のこのスピードは魔法による自身の速  
度上げされた類のものではない。これは正真正銘、ただの体術による  
ものだ。

続けて放たれた追い討ちの左足をなんとか紙一重で避ける。

これは俺が体術に長けていたから躲せた、という訳ではない。

奴のアクションが体術100%というのであれば、俺の行動は正真  
正銘魔法100%によるものだ。

とは言っても次の三撃目を避けることは出来ない。腰を下ろして  
防御の姿勢を取りつつ左手でCADを頭上にかざす。

ドカッという鈍い音を立てて、なんとか司波兄の手刀を防いだ。

「…自己加速術式でも減速領域でもなく、時空間制御か…なるほど、比  
企谷一族の人間は時間に関する魔法を得意とするらしいが…お前の  
ソレか？」

「…試合中に話しかけるとか、随分余裕じゃねえか、司波兄」

魔法は基本的に中学ではあまり高度なものは扱わない。

そもそも高校で習うのを根本としているためか、中学で教わる魔法  
なんてたかが知れている、というのが一般的な認識だ。

ただし、これも全てがその通り、という訳でもない。

この魔法科高校に入学前にある程度の高度な魔法を使用できる生  
徒のパターンは大きく分けて二つ。

家業の魔法で代々魔法技術が伝わっている場合と学校以外の場所  
で魔法を学ぶ機会があった場合だ。

俺の時空間制御なんかは正に前者にあたる。

ウチ（比企谷家）は代々時間系統の魔法の研究をしていたこともあり、ウチの人間は大抵時間に関する魔法を何かしら使えたりするのだ。

俺の悪態など気にもくれず、司波兄は足さばきのみで間合いを取ると右手で突きを放ち、そのまま左手を使ってさらに追い討ちをかけてくる。

右手を八の字に振るうことで決め技を逃れ、なんとか身を捻って追い討ちから逃れた。

「…なるほど、お前の時空間制御そのまほう 時間を止めているのではなく、使用者の時間速度を速め、周囲の体感速度を遅らせているのか…それに加えお前のその戦闘術：随分と戦い慣れているじゃないか」

奴には起動中の起動式を読み取る魔眼、精霊の眼、を持つていることから、俺の魔法の特性を見抜かれていても、それ自体は別に不自然なことではない。

司波兄の本当に恐ろしいところは別にある。

俺の魔法は奴の言う通り自分に流れる時間を速め、一定範囲の時間の流れを止まっているに等しい速度まで遅らせるというものなのだが、時間を止めるということは、その世界の情報を止めるということ。

つまり、普通であれば俺が魔法を使った時点で奴は俺という情報を認識することは出来ない。

本来であれば俺の勝利は確実だろう。

だが、そうはならない。

何故なら、コイツは、止まった時間の中で俺の動きを認識し、それに合わせた攻撃を放っている”

俺が身を捻りながら投げたナイフ型CADも難なく避けられ、涼しげな顔でそんなことをのたまう司波兄。

「…ハッ、魔法と戦闘に関して、だけ、は優秀な（自称）師匠がいたんでな!!」

司波兄の軽口に返答するようにさらにナイフ型CADを投擲する

も、やはりあつさり躲されてしまう。

残ったナイフは残り2本。加えて奴は未だ魔法すら使っていない。

俺がここからどうやったところで正面切つての勝利は厳しいだろう。

元々、司波兄が使える魔法は多くすらないが、奴が本気で掛かってくるきたならば俺は文字通り分子レベルで、分解 されてしまうのは必然だ。

そう、だからそんな、規定違反以上の魔法、しか奴が使えないところに勝機がある。

司波兄は再び一瞬にして距離を詰め、俺の額に自身のCADの銃口を向けた。

このまま副会長同様、異なるサイオン波で一気に決着をつける気だろう。

誰もが司波兄の勝利を確信したその時!!

俺は地面を蹴り、反り返りながら一つの魔法術式を展開させる。

「アクティブイーター、ダンシング・ブレイズ、」

先程も述べたが高度な魔法は原則高校に入るまでは習うことはない。

しかし何事にも例外があるように、この原則にも例外は存在する。

一つは家業の魔法が代々伝わっている場合、そしてもう一つは、学校以外で魔法を学ぶ機会があった場合、だ。

ダンシング・ブレイズは俺が彼女ししやうから習った最初の魔法であり、使い勝手の良さでは頭一つ抜けたお手軽便利魔法だ。

俺の音声認識でアクティブ化することでナイフを操るこの魔法は、先程、投擲したナイフ、を中心に司波兄を背後から襲い掛かる。

流石の司波兄とは言えどまさか予想だにできなかった音声認識型のCADに、精霊の眼をもつてしても飛来するナイフを躲せなかった。

唸りを上げて飛んだナイフの切っ先は司波兄の肩に直撃し、司波兄



の体勢が多少崩れる。

多少でいい、ほんの少しでも奴の気が逸れば大成功だ。

自身の時間速度をさらに加速させ、CADを持つ手に力を込める。

司波兄の行動は予想以上に早く、崩れた体勢を整えるとCADの銃口をこちらに向ける。

おそらく次の攻撃を一度でも食らうとその場で負けるレベルの魔法だろう。

いくら奴が”直接死に至らしめるような魔法”は使わなくとも、俺1人絶させることは本来容易なのだ。

そんな司波兄に対し活路は1つ。撃つ前に打つのみ。

勝った：双方が共に確信する。

負けた：双方が同時に理解する。

互いのナイフと銃身とが、互いの首元と額に押し付けられた。

：後一步、後一步踏み込めば、俺のナイフは司波兄の頸動脈を切り裂くだろう。

だが、俺がもしここでピクリとでも動けば司波兄の銃口が俺の額を撃ち抜くに違いない。

体感にして永遠にも等しく感じるこの感覚にどうにかなりそうになりながらも、目の前の司波兄と視線を交わす。

：ここから先は殺し合いだ。学校の模擬戦程度のことでもなにも殺し合いまでする必要はない。

つーか、俺の魔法、使ってる最中はまだいいけど元の時間に戻す時の振り戻しがヤバイ：早く終わってくんねえかな：リバーズしそう。

そんな俺の思いが伝わったのか、渡辺先輩は俺と司波兄を交互に見渡すと模擬戦の結果を口にした。

「そこまで!!両者引き分け!!」

そんな渡辺先輩の宣言と同時に目の前の光が反転する。

あー、というか、これあれだ。

自分の時間イジリすぎた反応が意識まで来たヤツだ。

「…比企谷くん、貴方、その魔法」

七草会長が何か詰まるように聞いてくる。

いや、別に秘密にしているとか隠さないといけないとかそういう訳ではないのだが、今は口を開くのですら気だるい。

「…司波、ちよつと後頼むわ…」

そう一言口にすると俺の意識はゆっくりと暗闇に落ちていった。

気がつくとも第三演習室に残されていたのは俺と司波兄妹だけであつた。

「気がついたか、もう少し眠っているようなら保健室にでも運ぼうと思つたが」

まず初めに口を開いたのは司波兄。

まずは現状確認だ。

「…あー、あれからどんくらい時間経つた？つつか会長達は？」

未だ冴えない頭でポーツとしながら質問する。

別にコイツを信頼していたワケではないが、コイツら兄妹の場を捌くスキルが高いことは知っているし、何より俺じゃ出来ない。

俺じゃ出来ないなら、ほかのできる奴がやるべきなのである。

なんだったらできない奴であってもやらせているうちにできるようになるかもしれないので、やはり俺以外の誰かがやるべきなのである。

ここは親鸞上人よろしく、他力本願の精神で目の前の司波兄に業務委託つつかアウトソーシングしたというわけだ。

俺、マジブツテイスト。

まあ、親鸞そんなつもりで言ってねえけど。

「お前が倒れてからまだ30分も経ってはいない。会長達には先に生徒会室に戻ってもらっているが…お前も無理したな、そこまでして七草会長になにかして欲しかったのか？」

司波兄はそんないつも通り少し意地の悪い顔で手に持っていたペットボトルを俺に投げ渡す。

…違えよ、ワザと負けられない状況だったんだっつーの。

「…不潔ね」

司波妹がまるでゴミを見るかなような目で俺を見る。

「偏見だ！高校男子が卑猥なことばかり考えてるわけじゃないぞ！」

他にもいろいろと、えーつと、考えてるよ！

…世界平和？とか？うん、あとは特に考えてないな。

「ふうん？」

司波妹は疑わしきは死ねという目で俺を見てくる。

とうかこいつさつきからなんでこんなに刺々しいの？ご両親、ウニかなんかなの？

いや、こいつらの両親は会ったことないが、親戚を名乗る戦闘民族になら会ったことがある。

まあ、うん、言明は避けるけど、あのビームおばさんというか…あの叔母あつてコイツらあり、みたいな人だった。

「まあ、けしかけた本人が言うのもなんだが、お前の身体を案じているんだよ、深雪は」

「いや、本当だよ、ならなんでけしかけたんだよ…っか、その、倒置法で暗に自分は違うアピールいらねえから、知ってるから」

まあ、司波兄に心配されるとか怖気が走るし、本当されたくねえからいいんだけどね。

そんな俺の質問には答える素ぶりすら見せず、司波兄は続ける「それだけ話せるくらい回復したなら俺達は生徒会室に戻るが？」

司波兄は暗に目でお前はどうか？と訴えてくる。

まあ、一応ここまで来たなら行かないワケにも行かねえよなあ…

「…あー、後からいく」

「そうか」

自分から聞いた割には興味がなさそうに返事をする、司波兄妹は第三演習室を後にした。

人が減った、というかようやく1人になったお陰か、窓からうららかな春風が吹き抜ける。

…あー、行くの面倒だなあ。

風通しの良い職場っていうのは人が少ないって意味なんじゃねえの？、と今から自分が置かれそうなブラツクな労働環境を考えてしまった。

## 無銘9

事務室にCADを預け直し、再び生徒会室へ向かう途中、何らかの用事で外に出ていたのか七草会長と出くわした。

「…あら、比企谷くん」

「どうも」

軽く会釈をした後、会長と並んで歩く。

両者共に目的地は同じなので自然と向かう方向は同じになってしまふのは仕方がないのだ。

静かな時間が放課後の閑散とした廊下に流れていく。

俺から話しかけることがない以上そうそう会話も生まれない。

ただ、先程までの妙に馴れ馴れしい絡みをして来ない為か、今の会長がおとなしめに見える。いや、大人らしいというべきなのだろうか。

「……………」

「……………」

存在を認識し合っているのに、言葉は出ず、ただその挙動を窺うようにそっと覗き合う。

いや、別に会長と気まずいってワケでは無いのだが、会長のこれまでと違う対応のギャップに戸惑ってしまふ。

それは例えるなら地元の駅を使ったとき、ホームで同じ中学の同級生が隣のキャビネットの乗車口にいたときに近い。『やべ、瀬戸口君だ…』とこつちが気づいていて、相手も『あー…誰だっけ…ひ、ひき…まあ、いいや』というあの状況。おい、思い出すの諦めんよ。

あー、これはあれだ。べ、別に相手が俺のことを覚えてないとかではなくて、俺の記憶力が半端ないだけだ。頭脳が優秀なのだ。

ぼっちは人の名前を覚えるのが以外に得意なのである。いつ話かけられるのかなードキドキと思ってしまうからなのだろう。

勿論今の俺はそんなことはないことは知っているし、食堂に連れて行かれることもなければ戦車も始めない。

それに、どれくらい俺の記憶力が優秀かといえば、一度も話したことの無い女子の名前を呼んだとき、榎本さんの顔が『何で名前知ってるの…怖い…』と恐怖に歪んで…まあ、俺の話はいいか。

とにかく、今の俺と七草会長の空間は、一流の剣豪同士が間合いを測り合うようなあの瞬間に似ていた。

『この勝負…先に動いたほうが負けるな…』みたいな雰囲気である。

そんな妙な空気を先に壊したのは会長だった。

「…比企谷君、その、身体はもう大丈夫なの？」

何かに遠慮するかのように聞いてくる会長の目には俺の身体への心配が見て取れる。

まあ、いくら会長も焚きつけた側とはいえ、時間系統魔法を使ったのは俺の失策だしな…気にしてもらいたい過ぎるのは気が引ける。

いかんいかん、ぼっちは決して人に迷惑をかけないものなのだ。

「…ええ、まあ、とりあえずは何とか。ご心配お掛けしました」

「本当よ！まったくもう!!」

会長はプンスコと頬を膨らませると、手を腰に当てて顔をピイツと逸らす。

うーん、この人のこういうところがあざといなあ…と思うところなんだけど、まあ、今回は俺にも非があるので黙っておこう。

「比企谷くん、貴方が達也くんと模擬戦で使った魔法は無系統魔法のエクストラと呼ばれる…いいえ、時間に関する魔法ですね？」

「？はい」

まあ、別に秘匿されている魔法という訳でもないのに、会長が時間系統魔法を知っていても特段不思議ではない。

時間系統魔法は基本コードでこそ解明はされていないが、まあ、おおよそ無系統魔法の理論に近いモノがあるため端役<sup>エクストラ</sup>という位置付けになっている。

会長はふう…と一息吐くとそのまま話を続けた。

「時間に関する魔法は未だ魔法研究においてほとんど解明されていません。それに加えて、この魔法は使用者に大変危険な副作用を齎すことから、この魔法を実戦で使う魔法師は殆どいない、というのが一般

的な考えです。ご存知ですか？」

「ええ、まあ」

「なら…」

何故そんな魔法を使ったのか、この返答いかんによっては危険性を正しく教えてながら会長のお説教タイムへとシヤレ込むことになりそうだ。

うーん、めんどくせえ…ここは何とか会長を言いくるめなくては!! 「あー、いや、あの魔法は得意分野なんで大丈夫ですよ。まあ昔からよく使っていましたし、使い勝手も分かっているんで…」

俺の返答に会長は顔を顰める。

会長はその場で少し立ち止まると手を顎に当てこちらを観察するかのようじつと見つめてきた。

「昔から…そう、苗字を聞いた時からまさかとは思っていたけど、比企谷くん、貴方は、あの、比企谷」の人なのね」

「はあ、まあ、会長がおっしゃっている比企谷かどうかは知らないですけど…」

会長に問われて、思わず言葉に詰まってしまう。

ただ、嘘はついていない。、あの、という冠詞が指した比企谷と俺の知ってる比企谷が同じかどうかは判断がつかない。

「そう？聞き方が悪かったかしら。なら、こう聞きましようか？貴方はあの、カナガワ、の比企谷なのか、という意味だったのだけど」

そこまで情報が揃えば俺の知る比企谷と同じモノだろう。

会長の言う、カナガワ、とはとある魔法師達の家系群の通称だ。

2030年代前後、第三次世界大戦前に日本政府が設立した魔法師開発のための機関 魔法師技能開発研究所が遺伝子操作も含めた研究の際一つのプロジェクトを立ち上げた。

緊迫化する国際情勢に対応するべく、一つの分野において当代最強の魔法師群すら超える魔法師の作成というコンセプトを基盤に作られた魔法師達の話である。

結果から言えば勿論プロジェクトは失敗し、その魔法師達は各々別の場所に去って行った、という概要のモノ。

まあ、俺もそんなに詳しいワケではない。

そもそも魔法技能開発研究所が戦後間もなく解体されてるところ  
辺りからして結果など明白なワケで、この話自体親父からちよろつと  
聞いたくらいのものだ。

ただ、葉山家、雪ノ下家、由比ヶ浜家、戸塚家、川崎家、三浦家、相  
模家、平塚家、材木座家、城廻家、そして比企谷家の11家のくくり  
としてたまたま全家系が神奈川県の名に由来していることから、  
カナガワ、と呼ばれたりしていたことがある、という話を聞いたこと  
がある。

まあ、確かにこの11家はその成り立ちから微妙に特異な魔法研究  
が確かに進んでいたりするのだ。ウチの時間系統魔法なんかもその  
一つ。

むしろそれ以外は普通の魔法師達と変わらないまでである。

勿論、呼ばれていたのは随分と昔の話だし、今更その呼称に何の意  
味も無い。

逆にその呼ばれ方をされるのは俺の千葉愛への冒瀆とも取れる。  
許さない、千葉、絶対。

I love 千葉。千葉こそが最強。千葉があつてこそその日本。  
いや、もう千葉こそが日本といつても過言じゃないんじゃないの？

(過言)

とにかく俺の千葉愛を舐めてもらっちゃ困る。盆踊りとか行くと  
必ず千葉音頭踊っちゃおうし。

ちなみに千葉音頭は千葉の盆踊りであり、千葉では『なのはな体操』  
ばりにメジャーだ。千葉県民は皆どちらも歌って踊れる。ついでに  
『なのはな体操』に歌詞は無いが何故か歌える。

そんな熱い千葉熱はともかく、会長が聞いているのは間違いなくウ  
チのことだろう。

「ええ、まあ、そういう意味ならそうですね」

「…そう、ただいくら得意であっても倒れるくらいの反動を身体に与  
える魔法の多様は避けたほうがいいわね。毎回成功するとも限らな  
いし、将来的に見ても寿命を縮めてしまいかねないわよ」



まあ、言われてみりや確かにそうだ。いつもいつでもうまくいく保証はどこにもないけど（そりゃそうじゃ！）

ただ、この魔法に関して言えば発動に失敗する、ということは無。でもそんな難しい魔法でもないし、比企谷家の人間なら大抵使える。

まあ、そんなこちらの事情を話しても仕方がないので口には出さないが…。

俺の曖昧な返事に会長は仕方ないわね、と肩をすくめると、それ以上追求するつもりは無いのか、七草会長は問うことをやめた。いや、諦めたと言い換えた方が正しいかもしれない。

そこからはまた静寂した時間が続く。

会長も俺も特段会話することもなく、生徒会室に向かって歩みを進める。

先程も述べたが、相手が会話を振らなければ基本的に俺から会話を振ることはない。

なんとも実に俺らしい距離の取り方だ。

世間話や一つの題材についてであれば話したりするが、個人のプライベートに触れることはないだろう。

「何歳ですか?」「どこに住んでいますか?」「誕生日はいつですか?」「兄弟はいますか?」「ご両親の職業は?」そう言ったことを俺から聞くことはまずない。

その理由をいくつか推挙するのであれば、もともと他人への興味が薄かったり地雷を踏まないようにしていたり…まあ、あと、ぼっちは質問するのが下手、というのもある。脈絡もなくそういう質問をするのがなんとも居心地が悪いのだ。

立ち入ったことを聞かず、決して踏み込まず、これはこれで剣の達人同士の間合いの測り合いのようなものだ。

2人して殆ど生徒が下校した静かな廊下を歩いていると七草会長は思い出したように口を開く。

「そういえば比企谷くん。奉仕部のことだけど、実はもう1人部員になつてくれる子を見つけているのよ」

「…部員、ですか」

奉仕部という言葉聞き、ちよつと嫌な気分になつてるところに会長の部員いますよー宣言。

沈みかかった心がさらに重みを増してズルズル沈むのがわかる。

こんな宣言いらねえよ、なに、アイドルにでもなるの??ギター??

…この会長ならアイドルやってても不思議に思えないから本当ア  
レ。

いや、まあ、部って言うくらいだから他に部員もいるんだろうけど、奉仕なんてやりたがる意識高い奴と上手くやれる自信がない。

なんなら誰とも上手くやれないまでである。

「ええ、貴方と同じ中学校の出身で今年入った一年生だから、もしかしたら知り合いかも知れないわね?」

「同じ中学…ですか」

聞いて重い肩がさらに下がる。

中学の思い出なんてロクな物がない。ふと去年までの、黒歴史が脳裏によぎり、じんわりと頭皮の汗線が開いていく。

背中にも、つと汗が垂れていくのがわかった。

そんな俺の心情はつゆ知らず会長はさらに話を続ける。

「…実を言うとね、奉仕部のことはその子から教えてもらったのよ。自己改革を促し、生徒達の悩みを、解決する部活…それを聞いた時にね、今の当校に必要なのはこれだ!!って。しかもその部活の経験者が入学してくるなんて聞いたら勧誘するしかないじゃない?」

そう言つて可愛らしく小首をかしげる会長。

…いや、じゃないって言われても。

しかし、と言うことは他の奉仕部部員は中学の時の奉仕部を知っていた人物ということだ。

そもそも中学時代の奉仕部はあまり周囲に知られた部活ではない。時々何をする部活なのか確認しておかないと、本当に何をする部なのかわからなくなるほどだ。

だって、普段は俺もあそこの部長もただ読者してただけなんだぜ?もう1人いた部員なんて携帯いじつてただけだし。

そんな活動してんのかしてないのか分からんような部活に依頼を頼んで来る連中で俺と同じ学校・学年となると自ずと絞れてくる。

その中でも意識が高そうで、こんな人がやりたがらない仕事を好んで引き受ける物好きと言えば……うーん、考えに考えて抜いて葉山隼人という希代のリア充が思いつく程度だ。まあ、葉山ならこういう仕事も引き受けるかもしれない。

だが、風の噂で奴は中学卒業後、家の都合で魔法科第三高校に入つたとか何とか聞いたような……。

それにもし、この学校にいるならば奴程の人物が全く注目されないワケがない。

奴の噂を聞かない、ということはつまりとところ　この学校に葉山隼人という人物はいない。

だから彼という選択肢は消える。

……やっぱり思いつかない。え？材木座？珍しい苗字だな。で、誰それ？

そもそもアレの進学先とか知らんし……ちよつと事情あつて中学の卒業式すら出てないしな、俺。

まあ、要するに今までの人間関係はきつちりリセットしてここに来ている。

例外の下鬼畜兄妹を除けば基本的には一人、孤高で孤独ないつもの俺だ。

本来ぼっちというのは誰にも迷惑をかけない存在だ。人と関わらないことによつてダメージを与えない、究極的にエコでロハスでクリーンな生き物なのだ。

常に人間関係をリセットすることで俺は心の平穏を取り戻し、世間は何事もなく進んでいく。

だから、中学時代の同級生と言われてもピンとこない。基本的には一期一会の精神なのだ。

今までもこれからリセットし合いながら、お互いの日常に戻り戻りしながらやっていければいいと思つている。

人生はリセットできないが、人間関係はリセットできる。ソースは

俺。

現に中学の同級生とか一人も連絡とってな…それはリセットじゃなくてデリートでした、てへっ。

まあ、そんなワケでこの学校に（基本的に）知り合いはいない。

「…まあ、俺にはこの学校で知り合いなんて、あの司波兄妹を除けば思いつかないんですけどね」

「そう？でも彼は貴方のこと知っているみたいだったわよ？」

彼…??

七草会長が首を傾げて俺を見た。今気がついたんだけど、女の子が上目づかいで小首を傾げて見つめる動作ってすげー可愛いのかな。ふしぎ発見。

「いや、こういうのはあれですよ、一期一会ってやつです。出会いがあれば別れもある」

「素敵な言葉のはずなのに貴方が使うと後ろ向きな意味でしか捉えられないわね…」

会長は呆れたように言うが、実際、人生なんて一期一会だ。

小学生の頃転校していく奴に手紙書くよって約束して俺だけ返事が来なくて二度と送らないとかそんな感じだ。蒼太くんにはちゃんど返事が来たんだけどなあ…。

君子危うきに近寄らず、来る者は拒み、去る者は追わず。多分それがリスクを負わない唯一の方法だろう。

会長は進む足を止め、その場に立ち尽くすと、考えるようなポーズを取り、目をつぶって少しの間思案する。

やがて、ウンウンと頷きながら口を開いた。

「比企谷くん…私、貴方を調教…じゃなくて更正させないといけないと思うの」

ちよつと？調教と更正って全く意味が違うと思うんですけど!?

「いや、更正って…別に求めてないんですけど…」

「…貴方ね、それは変わらないと社会的にまずいレベルよ？」

七草会長は「右足を出して左足を出すと歩けるでしょう?」「くらい当たり前前の正論を、言うような顔で俺を見た。

「なんていうか、その、変わるとか、変わらなだとか他人に俺の『自分』を語られたくないっていうか…人に言われたくらいで変わる自分が『自分』なわけないだろっていうか。そもそも自己というのはですね…」

「ハイハイ、分かったわよ。とにかく私は貴方を更正させます。これは生徒会会長の私が決めたことよ。いいわね？」

会長は人差し指を俺の口元までもって行くと、小さい子供をあやすように口を塞いだ。

俺がデカルトの言葉をパクリながらちよつとかつこいいこと言おうとしてたのを七草会長に遮られてしまう…本当にちよつとカッコいいこと言おうとしたのに。

俺が抵抗しても無意味だと悟り、降参とばかりに手を挙げると、会長もよろしい！とばかりに満足気に微笑んだ。

うーん、なんだこれ。

笑うと口元にえくぼができるとか、少し八重歯が覗くとかそんなふうでもいい情報を得てしまった。

そんなやり取りをしているうちに、生徒会室の部屋の前。

会長はさらにその奥にある風紀委員室に用があるのか、『ちよつと新人風紀委員の様子を見にね！摩利とふたりきりだし気になるじゃない？』とかなんとか言つてさっさと行つてしまった。

何でも渡辺先輩は空気を媚薬にする魔法が得意なんだとか。何その魔法、薄い本の人かよ。

嵐のような会長が去った後に残った疲れが、どつと行きたく無い気持ちと一緒にため息になって溢れた。

生徒会室の部屋を開くと、丁度中条先輩が司波妹に何かを説明している最中だった。

「……」

戸を開けたはいいものの、何と声をかければいいのかわからない。

とりあえず、気持ち会釈して彼女達の近くへと進む。

「あー！比企谷くん。身体はもう大丈夫なんですか？」

中条先輩はそう言って近くにあったイスをズズズツとこちら側に引く。

「あ、どうも。…その、ご心配おかけしました」

会長にも言ったが、何より俺が勝手にやった魔法ことで人に心配かけるのは大変よろしくない。

ここは素直に謝っておこう。

「え!?あ、いえいえ、大丈夫だったんなら良かったです。でも比企谷君、魔法は一つ間違った使い方をすれば大変危険なモノですから、今後は注意しながら使って下さいね?」

先輩はちよつと驚いたように目を見開いた後、本当何も無くて良かったですつと微笑んだ。

おい、これ俺史における最高の心配のされ方なんじゃないのか今の。

そんな先輩の優しさとは反対に司波妹が冷めた声で割って入ってきました。

「中条先輩、八幡をあまり甘やかさないでください。彼の将来の為になりません」

…俺史における最低の心配のされ方だったろ今の。

「そういうのは一度でも俺を甘やかしてから言え」

一言二言言い合ってから引いてもらったイスに腰をかけ静かに座る。

「えつと…仲良いんですね、司波さんと比企谷くん」

中条先輩が少し驚いたように俺と司波妹を見渡した。

…え、何それ、新手の罰ゲームよりタチが悪いぞ…

俺の心底嫌そうな表情が隣に座っている氷結の魔女にも伝わったのか複雑そうな顔で中条先輩に返答する。

「…そうですね、中学の頃からの知己でもありますし、お互い多少の勝手は知っていますので」

いくばかりか声のトーンを下げた事実のみを述べる司波妹の目は

もう正に狼狽って感じだし、なんならスーパーじゃなくてもチャンピオンになれそう。

それを受けて中条先輩はあわあわ慌てながら両手をぶんぶん振った。

「あ、いや、なんていうかすごく自然だなんて思っただけですよ!?!司波さんも、その、普通に同級生の男の子と話んだなーとか、比企谷くんもそんなに話す方じゃなさそうなのになーちゃんと喋ってるなーとか」

「いや、喋りますよそりゃ…」

そんなにコミュニケーション能力無さそうに見えますか。

まあ、そんなことを話していても仕方ないので早速本題に。

中条先輩が手元のPCを起動させ、目の前の画面にはいくつかの円筒状のデータが表示された。

「…本当は市原先輩がやった方がいいんですが、今ちよつと席を外しているので代わりに私が説明しちゃいますね。当校で使用されているデータベースは現在最も普及しているモーリ式MD-IIDです。高校とはいえど狙っているスパイは山ほどいますので細心の注意を払って下さい」

中条先輩の解説に2人して頷きながら続きを促す。

「司波さん、比企谷くん。モーリ式を扱った経験はありますか?」

「中学レベルですがA評価をいただきました」

「まあ、普通の一般人並には…」

「最初のうちはそれで十分ですよ。私にも出来たんですから、お2人ならどーんと来いです!」

中条先輩は物理的に胸をどーんと叩いてゲホゲホと自爆していた。

大丈夫かよこの先輩…と思つて隣の司波妹をチラッと見ると、司波妹もまた多少驚いたように先輩を見つめていた。

ある意味でまっすぐな視線を受けて、中条先輩は誤魔化すように咳払いをした。

「…ほん…生徒会の業務は学校行事の計画と記録、学校に対する予算申請と決済報告、他の魔法科高校との打ち合わせと親睦、生徒の学校への苦情・要望受付、学校から委託されたデータの整理など多岐に渡

りますが、司波さんと比企谷くんにはまず学校から委託されたデータの整理をやってもらおうと思います」

そう言って先輩は円筒状のデータの一年生と書かれた部分をタップする。

そこには司波妹を筆頭に北山、三井となんだか見覚えのある顔ぶれもちらほら…

「あー入試成績順のデータが残っていたようですね、五十音順に直します」

おい…本当この学校の個人情報の保護とかどうなってんだよ。

そのうちどこかのアプリにでも流されちゃうんじゃないの?? 運営批判したらBANされるとことか。こっちは反省文じゃ取り返すつかねーぞ。

「次は…この学外活動データを開いてみてください」

中条先輩の指示に従って円筒状のデータと五十音順に並べられた生徒の一覧の活動データを開いていく。

すると隣からカチャカチャという機械音が、え、何この旧世代のキーボード音みたいなの!?

おかげで思い出したくもない実家のことを思い出してしまう。

それは俺が営業部に着任して間もない頃…

電車の呼び出し音やメールの着信音がひっきりなしに響くオフィス内。

たまにチラツと他のデスクにいる人たちに視線をやると…

「……………はあー。ちっ」

ガタツ、ガタタタタツ、ガタツ、ダーン!と、やたら勢いよくキーボード打ってはため息と舌打ちを繰り返す40過ぎのおばちゃん。

「申し訳ございません。納期までにはなんとか。はい申し訳ございません。頑張ります。いえ、申し訳ございません。なんとか、ええ、頑張ります、はい。申し訳ございません」

電話口でお腹を押さえながら額の汗を拭いて辛そうにきている30代後半くらいのおっちゃん。

「そちらの担当の方は出来ないっておっしゃってましたが、私ども



から言わせていただきますと、出来ないっていうのは嘘つきの言葉なんですよ。無理って言ってもとかくやる。そうして出来ましたら、それはもう無理じゃない。つまり、嘘をついたってことになるんです」

それこそ俺には無理そんなことを、電話の相手にニコニコ笑顔でもいいこと言ってる風に語っているのは20代半ばの老け顔のお兄さん。

お三方とも自分の仕事と誠実かつ真摯に向き合い、その結果、心を病んでいて、オフィスの片隅で練り広げられている俺への本家からの売り上げノルマについての怒号など興味がないようだった。

…あの職場、ブラック過ぎだったな…誰も助けてくれないし。

むしろ、俺が他のみんなを助けてあげた方がいいんじゃないかと思ってしまうくらい、あの職場は病んでいた。

「でも驚きました！司波さんコマンド入力なんですわ！それにすごく速いです！」

中条先輩の声で過去に馳せていた意識が引き戻される。

「兄がコマンド入力なものですから、兄に比べれば私なんてまだまだです！」

中条先輩に愛しのお兄様の技術が褒められて満面の笑みの司波妹。あつ、せつかく引き戻ってきた意識がまたどつか別の場所に飛びそう。

中条先輩も軽く引いていた。うん、まあ、そうだよ、この兄妹色々とかカシイからね。

軽くどころか俺は相当引いていた。

中条先輩は話題を変えるためか、咳払いを一つする。

「んっ…んん、あ、そうだ！今年度より加わる新しい役職の特別生徒会役員の説明がまだでしたね！」

ああ…そういうえばそんなワケのわからない役職名もありましたね。

「お2人とももう分かっているかもしれないませんが、この学校には普通の高校の生徒会に見受けられる庶務と呼ばれる役職はありません。基本的に今まで必要が無かったこともありませんが今年度より部活連

とのさらなる関係強化の意味合いも含めて特別生徒会役員という役職が設置されます。

特別生徒会役員は部活と生徒会の両立を主とされる役職です。ですから基本的に毎日生徒会に顔を出す必要はとりわけてありません、ですが最低でも週に二回はこちらに来てもらうことになると思います」

中条先輩が特別生徒会役員とかいうワケわかんない役職について説明をしてくれている…ふむ、まあ、これ纏めると部活と生徒会の両立と雑務処理みたいなモンか。

そうした単純作業はある意味で肉体労働よりもキツイ。掘った穴を埋め、さらに同じところを掘るような拷問にも似たものがある。

「その他で特別生徒会役員は一般の業務の他に個人的要望が送られて来るので、その都度問題の解決に向かってもらいます」

そう言っただけ表示するのは一つのメールボックス。

中にはメールが数件入っている。

中条先輩…これは…え、マジですか？これ、俺がやんの!?

「勿論全部が全部という訳ではありませんし、生徒会も出来る限りお手伝いしますが、基本的には比企谷くんの担当になります」

「そ…要するに、はーくん、の主な業務は基本的な生徒会の雑務と一高生から送られてくる依頼の解決ということよ」

風紀委員会本部と直接繋がった階段を七草真由美げんきよがそんなことをのたまいながら、生徒会室に戻ってきた。

つーか、はーくんって俺のこと？なんなのこの人？

正直、あだ名をつけられる程仲を深めた訳でも知った仲でもないんだけど…

俺が抵抗の意味も込めて普段より数倍ドロツとした眼差しで見返すも効果はないようだ。

会長はニコニコと…いや、ニマニマと人の悪い笑みを浮かべている。

そんな新しいオモチヤを見つけた!!と言わんばかりの会長の視線から逃れるように後ろの扉に目を向ける。

すると、唐突にガチャと戸が開いた。

「?・何だ」

聞き覚えのある声と共に制服を翻しながら生徒会室に入ってきたのは誰であろう、俺へのオフエンスに定評のある司波兄だった。

「…いや、別に」

こいつ…会長も厄介だがコレはコレでもっと厄介なのでさらに俺の目が急速に濁りを増しているのがわかった。

司波兄は俺の視線などまるで気にしてない風で、室内を見渡し、再び俺に視線を戻す。

おい、そのあからさまに憐れむ視線やめろ！本気で傷ついちゃうだろうが。

「ふむ、比企谷も真由美に気に入られたか…ご愁傷様、まあ、なんとなくこうなる気はしていたがな」

さらに司波兄の後ろから来た渡辺風紀委員長が続ける。

「委員長」

「ん、ご苦労だったな達也君」

「ふーん…摩利を委員長と呼んでるってことは、スカウトに成功したのね」

「最初から俺に拒否権は無かったように思えますが…」

「…それは俺もなんだよなあ…」

諦めを滲ませた司波兄の投げやりな呟きに乗せて、人の悪い顔をしている七草会長に声を向ける。鬼!!悪魔!!上司!!

その態度が会長にはお気に召さなかったのか、彼女は、片手を腰に当て、人差し指を立て、頬を膨らませて拗ねた目で睨みつけるといふ、考えつく限りのわざとらしさを尽くした態度のおまけ付きで司波兄に抗議する構えを取った。

「ちよつと2人とも、おねーさんに対する対応が少しぞんざいじゃない?」

「…いや、俺、姉はいないんですけど…」

「んー?何か言った?はーくん??」

「…いえ」

怖!?表情で笑っているのにこの寒気は…もしや殺気!!?

会長の目はそれ以上揚げ足を取るのであれば、こちらも容赦はしないわよ?と雄弁に語っている。

すると、前方で何か考えるように腕を組んでいた司波兄が口を開く。

「会長、念のためにといいますか、確認しておきたいことがあるんですが」

「んっ、何かな?」

「会長と俺は、入学式の日が初対面ですよね?」

それにしても馴れ馴れしくないかこの人、という司波兄の気持ち痛み程見て取れた。

いや、本当になあ…対人距離でその人間のコミュ力は測ることが出来る。これだけ近い位置で話せる会長は恐ろしいくらいのコミュ力なんだろうが…。

そんな司波兄や俺の心情はさておき、問われた会長本人はというと目を丸くして数秒司波兄を見つめたかと思えば、それが段々目を細めていき、邪なとしか表現しようのない蠱惑的な顔を作った。

「そうかあ、そうなのかあ…ウフフフ」

小悪魔、というのがピッタリの笑顔だ。

「遠い過去に私たちは出会っていたかもしれない。運命に引き裂かれた2人が、再び運命によってめぐり合った、と!」

いちいち芝居がかった動作で司波兄に絡んでいく七草会長。

う…うぜえ…。これがもし絡まれた相手が俺だったら、とりあえずイラツ☆ときた分だけデコピンするレベル。具体的に言うとな、消しピン対決で相手の消しゴムを自爆覚悟で抹殺するくらいの力で。

「…でも残念ながら、あの日が初対面ね、間違いない」

「…そうだと思います」

「ねっ、ねっ、もしかして運命感じちゃった?」

胸の前で両手を握ってこぶしを作り、顔を見上げる格好で司波兄に迫っていく会長。…ノリノリである。っーか、あざとい。

それがまた似合っているんだから…本当に絡まれた相手が俺じゃ

なくてよかった。

「…これが運命なら fate じゃなくて doom ですね、きつと」  
「クツ、くくつ…どちらにしろ悲運なのかよ」

正しくは destiny もしくは fortune (幸運) である。  
いや、全然正しくねえし幸運じゃねえな。

司波兄のため息代わりの返答についぞ吹き出してしまった。

さしもの会長も「そつ…そつかあ…」と寂しそうに呟き、その後ろ姿からは哀愁が漂っている。

これにはいくら司波兄とは言え、多少言いすぎたかと思ったのか、少し困惑した表情を浮かべていた。しかし。

「…チツ」

しょんぼりと肩を落としていたはずの会長の口元から、根負けしたような出たのは…舌打ち？

「あの会長」

「はい、何でしょう」

司波兄の返答に正面を向いた会長の顔には、新入生男子一同(一部を除く)を魅了した上品な微笑み。

しかしアレだな。

…この人本当男子に好かれそう。

わかる、俺にはわかる。これはアレだ。

ふわふわ系非天然隠れビッチだ。ふるふわ系清楚ビッチだ。俺の中学にもこういうのがいて、そりやもう男子を手玉に取りまくりだった。ジャグラーかと思った。

グランダー武蔵だつてそんな入れ食いしないっつーのに。いったいどんなルアー使つてんだつてくらいにフィッシュユしていた。

「…何だか会長のことが分かつてきた気がしますよ」

脱力した司波兄に人の悪い笑顔を向ける七草会長。

「そろそろ冗談は止めようか。達也くん、あんまりノリが良くないし」  
「服部や比企谷のようには行かないな、真由美。お前の色香もコイツには通用しないか」

ここぞとばかりに渡辺先輩が茶々を入れてる。

色々ツツコミたいところはあがあるが、ここはあえて黙ってしよう。何よりこの2人にこれ以上関わると俺の精神に影響を及ぼしそう…。「人聞きの悪いことを言わないでちょうだい。それじゃあまるで私の手当たり次第に下級生を弄んでるみたいじゃない」

流石に聞き捨てならない！とばかりにムツと顔をしかめて反論する七草会長：違うのかよ。

俺が本気で意外そうな顔をしたことが余計に気に入らなかつたのか、会長はさらにプクーツと頬をふくらませる。

「はーくんも摩利の言うことを信じるのね!!おねーさん悲しい!!」

よよよ、と手で顔を覆いながら泣き崩れるフリをする会長。う、うぜえ…というか指の間からチラチラこつちをチラ見してくるあたり本当あざとい。

「真由美の態度が違うのは君達のことを認めているからだよ、君達の何かに自分と相通ずるものを感じたのだろう。この女はとにかく猫かぶりだからな。自分が認めた相手にしか、素顔は見せない」

いきなり真面目な表情でそんなことを語る渡辺先輩。

俺としてはそんな認められ方いらないんだけどな。

期待しているから、認めているから、そういうこと言われるんですよ〜とか、それは愛情の裏返しですよ〜とか言われても普通に迷惑で鬱陶しいだけだったりするので、それが愛なら愛などいらぬ！我が求めるのは際限の無い甘やかashi!!

本当にもう俺を甘やかしてくる人はいないかしら（専業主婦志望）

「摩利の言うことを信じちゃダメよ、でも、認めているというのは本当かな？何だか他人って気がしないのよね。運命を感じちゃっているのは実は私の方なのかも」

舌でも出しそうな悪戯っぽい七草会長の笑顔に司波兄と2人して顔を見つめてしまう。

基本的に俺は希望も運命も宿命も信じてはいない。

朝のニュースと一緒に流れてくる星座占いも、橋の下の宿命のライバルとのポケモンバトルも、8時07分の二車両目の偶然も、全部が

全部自身の行動の意味付けに他ならない。

だが、確かに少しだけこの会長達を見ていると不思議な縁のようなモノを感じなくは無い…ような??

まあ、単に会長が馴れ馴れしくするもんだから、ちよつと距離感が狂っただけだとは思う。

本当、これ、俺が普通の一般男子だったら会長に惚れて告って玉砕するまである。

会長は是非とも俺が鋼の精神の持ち主だったことに感謝して欲しい。

まあ、俺のことはともかく、要するにあれだ。パンドラちゃんが持ってきた箱の中にはあらゆる厄災と一緒に希望が詰まっていたっていうじゃんか。

あれだよあれ。希望も信頼も運命も厄災ってことだ。あ！ついでにこの会長もな!!